平成25年度

事　業　概　要

（創立40周年記念誌）

沖縄県中央食肉衛生検査所

沖縄県北部食肉衛生検査所

写真でみると畜検査のうつりかわり

昭和５０年頃

那覇市曙にあった沖縄県食肉衛生検査所

（株）沖縄県食肉センター

中部食肉センター（株）

（株）沖縄県北部食肉センター

（株）沖縄県南部食肉センター

（株）沖縄畜産工業

（株）那覇ミート

（株）真玉橋食肉センターの様子：
当時の標準であった開放的な作りのと畜場。場内に汚染/清浄の区分けがなく、内臓検査台に複数と体の内臓がおかれていた。

（株）沖縄県食肉センターの様子：
と体には検印が片側5カ所以上押され、頭部検査では左右複数リンパ節を切開し病変の有無を確認していた。

＊表紙の写真は平成26年9月に新築移転が完了した中央食肉衛生検査所の新庁舎

昭和６０年～平成１４年頃

名護市世冨慶にあった北部支所
（昭和57年～平成2年）

道路拡張に伴い移転した北部支所
（平成2年～平成5年）

内臓にも検印。これは
六角形なので山羊の肝臓。

平成4年から食鳥検査がはじまった。生体検査、内臓摘出後検査などの検査体制が県内4カ所の食鳥処理場で整備された。

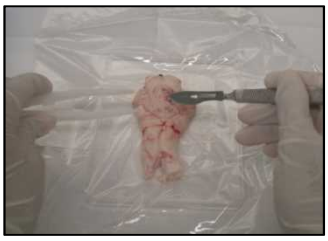
平成12年度まで稼働していた北部の山羊処理施設。解体前に全身を炙り黒こげにする方法は現在でも一般的。

平成８年の腸管出血性大腸菌O-157の集団食中毒事件をきっかけに、平成14年までにと畜場の設備及び作業の見直しが進んだ。内臓は赤モツ・白モツに分別され、頭部はつり下げ方式、手指及び器具の一頭毎洗浄消毒の義務化により、各所に消毒用の設備が設置された。この時期と畜場の統廃合も相次いだ。

平成１４年頃～現在まで

平成15年に沖縄県食肉センターに新たな大動物処理施設が完成。それまでのベッド方式からつり下げ方式に変わった。同年施行された牛トレーサビリティ法に対応した枝肉や内臓の個体識別管理も始まった。

平成13年10月18日から全国一斉に牛のBSE全頭検査開始。牛処理施設では延髄の採材・検査や特定危険部位の排除の体制が急ピッチで整えられた。平成17年10月からは山羊も検査開始。



←平成15年に完成した名護市食肉センターでは豚の赤モツはつり下げて検査。

平成23年に完成した沖縄県食肉センターの豚処理施設の様子。と体のレーンが高く設置され、処理頭数や保留頭数が場内のモニターで確認できる↓→

現在の各と畜場・食鳥処理場

中央食肉衛生検査所
（昭和54年3月～平成26年9月）

北部食肉衛生検査所
（北部合同庁舎内、平成5年10月～）

沖縄食鶏加工（株）

名護市食肉センター

（株）沖縄県鶏卵食鳥流通センター

（有）中央食品加工

（株）沖縄県食肉センター

食 肉 衛 生 検 査 所

創立４０周年記念誌

発刊のことば

このたび沖縄県食肉衛生検査所は、食肉の安全確保のための検査機関として創立されて４０周年、さらにこの大里（大里村、現南城市大里）の地に庁舎が建築されて３５周年という節目の年を迎えました。

この間、沖縄県の食肉衛生行政にご尽力いただいた関係各位に衷心より感謝を申し上げます。

さて、食肉を取りまく環境は社会情勢の変化に伴い年々厳しくなっております。最近では、平成２３年の東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所事故を原因とする放射性物質の拡散による食品汚染が問題になり、安全確保のため該当地域の牛の放射能全頭検査は現在も継続されています。

さらに、同年には生食用食肉を原因とする腸管出血性大腸菌Ｏ１１１による広域食中毒が発生し、死者５名、患者数１８１名に上り、食肉業界に大きな影響を与えました。厚生労働省は生食用食肉を規格基準化し、と畜場及び食肉処理場で微生物制御することにより汚染食肉の流通を制限しました。

また、馬肉の生食による食中毒が寄生虫（*Sarcocystis　fayeri*）によるものであることが解明されました。平成１３年から実施している牛の BSE スクリーニング検査の検査対象月齢が平成２５年７月に４８ヶ月齢超に引き上げられ、めん羊及び山羊の BSE 対策の見直しについても検討されています。

平成２６年度には省令改正が行われ、と畜場及び食鳥処理場に従来型の HACCP システムの考え方に沿った衛生管理基準と HACCP 導入型基準の選択制となりました。これは食中毒の発生及び食品衛生法に違反する食品の製造等の防止につながるなど、食品の安全性の向上が期待できること、また輸出相手国から HACCP 管理が求められることがあることなどから、HACCP による工程管理の普及を行うことを目的としたものです。厚生労働省は現行では選択制としていますが最終的には HACCP 導入型基準を目指すとしています。

このような食肉衛生行政をとりまく環境の変化に対応するため、今年度新庁舎となった中央食肉衛生検査所及び北部食肉衛生検査所では、時代に即した検査体制の整備強化をはかると共に、検査技術の一層の向上を図り、厳正なと畜検査及び食鳥検査を行い、食肉の安全確保に努めてまいります。

ここに、平成２５年度事業概要を創立４０周年記念誌として発刊いたしましたので、ご高覧いただければ幸いです。

平成２６年１０月

沖縄県中央食肉衛生検査所長
大 野 明 美
沖縄県北部食肉衛生検査所長
平 安 常 寛

目　次

発刊のことば……………沖縄県中央食肉衛生検査所長　大野明美……………　1
沖縄県北部食肉衛生検査所長　平安常寛

～祝　辞～

祝　辞………沖縄県保健医療部長　仲本朝久……………　2
祝　辞………公益社団法人沖縄県獣医師会長　平川宗隆……………　3
祝　辞………沖縄県食肉連絡協議会長　酒井文雄……………　7
祝　辞………沖縄県食鳥協会長　赤嶺 浩……………　8

～創立 40 周年によせて～

創立 40 周年によせて………中央食検 10 代所長/北部食検 6 代所長　長田悦朗…….　9
食肉衛生検査所への思い……中央食肉衛生検査所 11 代所長　渡口政司…….　11
国際基準の食肉……………北部食肉衛生検査所 3 代所長　比嘉健俊…….　13
祝　辞……………北部食肉衛生検査所 4 代所長　中島秀人…….　14
ふりかえって……………元中央食肉衛生検査所第 2 課課長　沢岻安晃…….　15

～40 年間のあゆみ～

1. 食肉衛生検査所 40 年間のあゆみ……………………………　16
2. と畜検査等 40 年間の推移（統計）
(1)と畜検査頭数の推移……………………………　19
(2)40 年間のとさつ禁止頭数……………………………　23
(3)40 年間の全部廃棄頭数……………………………　25
(4)22 年間の食鳥検査羽数……………………………　27
3. 調査研究 40 年間の発表状況……………………………　28
4. 歴代所長名……………………………　39

祝　　辞

沖縄県保健医療部長　　仲本朝久

公益社団法人沖縄県獣医師会長　平川宗隆

（沖縄県中央食肉衛生検査所第９代所長）

沖縄県食肉連絡協議会長　　酒井文雄

沖縄県食鳥協会長　　赤嶺　浩

創立４０周年記念誌発行を祝して

沖縄県保健医療部長
仲本　朝久

沖縄県食肉衛生検査所創立４０周年、誠におめでとうございます。これまでの歴代の所長を始め、職員の皆様の食肉衛生行政推進に対する熱意と努力に深く敬意を表します。

食肉衛生検査所は、食肉の安全確保のための重要な役割を果たす検査機関として昭和４９年４月に設立されました。創立当初は那覇市曙町の仮庁舎で、設備等についても不十分な中での業務が開始され、昭和５４年に現在の地に庁舎を新築移転し、計画的に検査機器の整備や組織の充実強化を図り、数々の重要な任務を遂行してこられました。

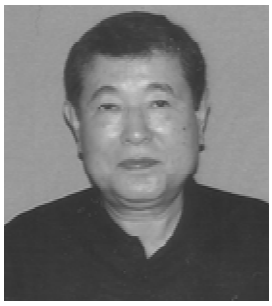
昭和５０年代は、高度経済成長とともに国民の食生活も改善され、食肉の需要も大いに伸びた時代であり、消費者の意識も量的なものから質的なものへ変わっていきました。

その後、平成４年に食鳥検査が始まり、平成８年には腸管出血性大腸菌による大規模食中毒事件をきっかけにと畜場法等の一部改正があり、と畜場にもHACCP システムの考え方が取り入れられることになりました。また、平成９年には食品衛生検査施設における精度管理が導入され、検査精度の向上が求められてきました。加えて平成１３年９月、我が国で初めて BSE の発生が確認され、同年１０月から全国一斉に牛の BSE スクリーニング検査が実施されることになり、平成１７年からはめん羊･山羊についても検査が実施されることとなりました。そして平成２５年７月、飼料規制等で BSE の危険性は大幅に減少しているとして牛の検査対象月齢が引き上げられ、めん羊･山羊の検査対象月齢引き上げについても現在国において検討されているところです。

このような食肉衛生行政を取り巻く環境の大きな変化に、遅れることなく積極的に対応して頂いた関係者の皆様に敬意を表する次第です。

消費者の食品に対する意識は年々多様化し、食の安全に対する行政の対応もより一層強く求められている中、現在、老朽化した中央食肉衛生検査所の建て替えが行われており、新庁舎完成とともに検査体制のさらなる強化が図られるものと期待しております。

安全な食肉･食鳥肉を確保するという重要な役割を担っている食肉衛生検査所の業務も益々重要になって参りますので、今後ともなお一層のご尽力をお願い致します。



おめでとう　創立４０周年

公益社団法人　沖縄県獣医師会長
沖縄県中央食肉衛生検査所・元所長
学術博士　平川 宗隆

感慨深いですね。あれから、もう４０年も経ったとは。

同時に４０周年記念誌に投稿を依頼され、自分も歳をとったものだと感じた次第。

さて、私は大学を卒業した１９６９年１２月に琉球政府厚生局那覇保健所久米島支所長の辞令をもらい意気揚々と久米島に赴任したが、当時は離島に配属されるとなかなか本島には戻してくれなかった。そこで２年が経過した頃、一計を画策し国際協力機構・青年海外協力隊に応募することにした。

幸いに合格することができたので上司に報告した。その年は本土復帰の年（１９７２年）で５月１５日を期して沖縄県になることが確定しており、これまでの琉球政府の法令が一夜にして本土法が適用され、システムも一変するために各部署とも激動の時期だったと思われるが、若気の至りでそんなことはお構いなし。今考えると冷や汗ものである。

４月から東京で任国（インド）への派遣に向けて訓練が始まることになっていたので、急遽、２月に辞令が出てコザ保健所へ勤務を命じられた。たった２カ月ほどの短い勤務であったが、嘉手納屠場を担当した。当時の衛生課長は大城信雄先生だった。久米島の私の後任には大城文雄先生が来てくれた。

３カ月の訓練の後、正式に協力隊員として派遣されるわけだが、県では復帰後初めてのケースで、休職を有給か、無給かで人事課も決めあぐねていたようであるが、私はそんなこともお構いなし。さっさと東京へ飛びたったので、残されたコザ保健所の担当者、担当課長や所長も大変苦労されたことを帰国後に知らされた。

さて、インドで２年間を過ごし１９７４年に無事生きて帰れたが、浦島太郎になった私は聞いたこともない沖縄県食肉衛生検査所（当時、北部は支所であった）に勤務を命ぜられた。本所の事務所は安謝の「とみはまビル」の５階だったと記憶している。その頃の屠畜場はまだ、整理統合がされてなく、旧屠畜場を改築した、中部、真玉橋、小禄、沖縄畜産、那覇ミートなどの屠畜場が残っていた。私は新装なった沖縄県食肉センターに配属された。旧屠畜場から新しいシステムの新屠畜場に変わる時期は様々な問題が噴出し、メディアを巻き込み県全体を揺るがした食肉検査史上最も激動の時期であったが、幸か不幸か、私がまだインド滞在中の出来事だったので、その洗礼は受けていない。帰国後に先輩方から耳にタコができるほど、その時の状況を聞かされたが、残念ながら今では、この激動期を語れる先輩方も少なくなってきた。

このことについて、沖縄県職員労働組合発行・県職労 20 年の歩み『録鮮明』から抜粋して紹介しよう。これは県職労結成 20 周年記念座談会「先輩大いに語る」に収録されており、

後に大田県政の副知事になられた吉元政矩氏が委員長時代のことを述べたものであり、当時の状況をよく伝えている。

吉元　先程ちょっと出たんですが、復帰直後の１９７３年～１９７４年頃の公衛支部「屠場職場の労働条件改善の闘い」は特筆しておかなければならない。これは県民的に県職労が批判にさらされながら、やっている行動の本当の意味を県民に知らせながら、安心して家庭で食べられる肉を検査員が責任を持って検査できる施設を造れという要求ですから。

司会　闘争の発端はなんですか。

吉元　復帰前の約束があって、それが復帰後あいまいにして実施しなかった。その理由が、いわゆる屠畜業者（ゥワーサー）の圧力に負けて実施しきれなかった。検査員はまじめだから、自分達が検査している肉は食わない、という話があって、それから問題になったわけです。もう一つは、定数の問題もあって、検査員の絶対数が不足しているから検査が行き届かない。それで検査を拒否しようじゃないかという運動が起こってくる。

　市場も混乱するし、婦人団体からも抗議されるし、屠畜業者からは包丁で脅かされるという現実があった。家族と組合員の安全を防衛しながら組合員は官公労共済会館に数日泊まり込んで、そこから出勤するという状態であった。組合が最後まで闘いを貫徹させたという点では、単なる労働条件の闘いということではなく、県民の食生活につながる安全という意味で言うならば、県職労の特筆すべき自治研の課題だったという気がします。

司会　屠場問題は、１９７３年２月から６月に亘って闘われ、大会議案書では「最も特筆すべき性格と多くの教訓を残している」闘いで「正しいことは断固やりぬかねばならない」と総括していますね。

吉元　検査がうまくいかない、進まない、悪い施設では検査はしないと、そうすると肉が市場に出ないわけですよ。検査の厳しさというのは、反対に食肉業者にとってはものすごいデメリットというのか、危険負担を強いるものですから、屠畜場の改善というのが容易に進まなかった要因もあった。

司会　改善してできたのが大里のきれいなところですか。

吉元　そうです。

司会　私が広報課にいるとき、県政モニターの施設見学にそこを２回選んだことがあるんですよ。昔からあったと思ったが、そういう背景があったんですか。

吉元　あれは汗と涙という言葉以上に、ある意味では命をかけた、そういうところまで行きましたからね。私はその節目節目で、ある意味では県民的に言うならば、少し不便を与えても、やっぱり積極的にそういう行動をすべきじゃないか。

司会　この闘いよって①人員増の確保、②初任給調整手当の新設、③給料の調整額、④特勤手当に大きな前進を克ち取った。しかし屠場問題についての資料は少ないし、当時の

関係者から聞き取りをして県職労の闘いの財産としたいですね。

どうですか皆さん、以上のような先輩方のご苦労があって、現在の検査体制は確立されたのである。後輩の皆様方には切磋琢磨して頑張ってもらいたい。

話は変わるが、昭和59年（１９８４年）～60年にかけて、私は獣医師会の事務局長を勤めていたが、昭和60年の獣医師会年報（第９号）に「沖縄県における屠畜検査の変遷」のタイトルで特集を組んでいる。中央食肉衛生検査所に保存されていると思われるので興味のある方はご覧になっていただきたい。ここでは紙面に限りがあり、独断と偏見に基づき抜粋し、概要を紹介することとする。

この座談会に出席していただいた先生方は、髙江洲義弼、大野繁雄、国吉真英、比嘉勇光、山城英文、山里明、金城永三先生らのそうそうたるメンバーであるが、残念ながら山里、金城先生以外は故人となられた。不肖、私が司会を担当し進行役を務めている。座談会の流れは群島政府、沖縄民政府、琉球政府、復帰後の沖縄県と時代に翻弄されてきた沖縄の歴史の中で屠畜検査に主眼を置き、将来の屠畜検査に言及した貴重な内容である。

《前略》

司会　現在、県食肉センターは、１日１，０００頭もの豚を処理する規模の屠畜場になっていますから、昔に比べると格段の差があるわけです。そこで現在、県食肉衛生検査所の所長をしておられる山城先生がおいでですので、今日の状況、さらに将来の展望等についてお話をお伺いしたいと思います。

山城　先程、お話にありましたように食肉センターは１日の処理能力は豚が１，０００頭、牛が５０頭で全部レールを流れる方式です。規模が大きくなって流れが速くなり、ケガをする検査員が最近多くなっています。流れの中での検査技術も相当熟練を要するところまで来ていると思っているんです。ただ本県の場合、検査実施要領に基づいて人数が揃っているので、確実に検査をしているが、他府県では人員不足で手抜きをしているところもあるんです。環境保健部次長の大嶺先生が現場を視察して、科学者たる獣医師がどうして血だらけになってバタバタするのか、もう少し汚れない方法はないか、考えるべきではないかという意見もありました。

山里先生も見てこられたと思いますが、ヨーロッパでは、インスペクターの上に獣医師が、エキスパートとして、より高度な学問的、技術面の検査を担当しているようです。私も将来はこのようなシステムが望ましいのではないかと思います。

山里　今、話にありましたミートインスペクター制度というのは、僕の行ったデンマークでは採用されていませんでしたネ。あそこはやっぱり獣医師がやっていました。イギリスあたりではそういう制度があるかもしれませんョ。
それは制度の問題ですからやっぱり慎重に考えてやるべきだと思います。そういう制度をとっているところはインスペクターを養成する施設がちゃんとあるわけなんですョ。

山城　今日、日本は外国に比べて獣医師の数が多いから、今のところ獣医が失業して困るので遠い将来の話かも知れませんがネ。

高江州　アメリカはそうじゃないですョ。トリヒナだけは特別に要請しています。

山里　だから機械的にできるものがあれば、そういうものに任せてもいいけれども、やっぱり流れ作業の中から病気などを見つけ出すというのはやはり獣医でなければならないのではないか。それは人間の医者と同じですョ。

山城　全国的に評価されてきたのは、現場の検査業務の中で炭疽を発見したことで、皆驚きだったと思います。検査の流れの中で見つけたということが非常に高く評価されたことなんです。

《中略》

司会　我々は実際に毎日屠畜検査に携わっているんですが、検査の過程で獣医師でなくてもできる仕事がたくさんあると思うんです。例えば検印を押したり、廃棄の一部を切り取ったりする仕事は獣医師でなくてもできる。そういったことを何とかできないかという要望がたくさんあるわけです。

私は時々屠畜検査の将来像について夢を描くんです。例えば現在、金属製の包丁を使っていますが、レザー光線やその他の光線を使ったメスで処理及び検査ができないか。あるいは給油所で自動車を洗車する方式で、瞬時に豚を洗浄したり、高圧エアーでさっと乾燥させたり、１頭１頭ガスバーナーで焼いているのをバーナー室を通過するだけで一度に数頭処理するシステムや検査済みの枝肉がレールを通過するときに検印を一度にパッと押したり、検印も現在のインクではなく、針や光線を利用した判別しやすい検印が開発されないか。あるいはレールも電動式で自動的に流れるものなどの夢を描くんですが、会社自身の必要性から近い将来こういうことも現実になるんじゃないでしょうか。それに伴い、我々検査員もこれらに対応できる研究をしなければならないと思います。ＯＡ機器の導入も検査の過程はもちろんのこと、それに伴うデータ処理は近い将来必ずやってくると思います。現実に最近の研究や学会等においてもその利用例が多数発表されております。中には類症鑑別の判断補助に応用しているところも見受けられます。これらについて山城所長、何かご意見はございませんか。

山城　これは面白い意見だナ。私は自分の検査する立場だけから考えていたが、今度は設備、施設の面から今の話のように包丁を持たなくてもできるような仕組みができると素晴らしいと思います。

《省略》

この夢のような話が、現在ほとんど実現している。科学は日進月歩で進んでいる。科学者たる獣医師は絶えず向学心と向上心を持って邁進しなければならない。ともに頑張ろうではないか。

※と畜やと場等のとは、わかりやすくするためにあえて屠を使用しました。

創立 40 周年を祝して

沖縄県食肉連絡協議会
会長　酒井　文雄

この度、沖縄県食肉衛生検査所が創立４０周年を迎えるに当たり心からお祝いを申し上げます。

沖縄県のと場と食肉衛生検査業務の歴史を顧りみますと、と場の衛生設備・施設改善と食肉衛生検査所の発展とは常に同時期に歩調を合わせながら進められて来たことがよく窺われます。

戦後、琉球政府時代には毎日各と場に保健所から獣医師が派遣されと畜検査が実施されたとあります。

その後、本土復帰に伴い、沖縄県行政組織規則により食肉衛生検査所が那覇市曙に設置されております。

本土復帰と共に、日本国のと場法の施行によりと場の大幅な改善が必要とされ、多数あったと場が本島内で食肉衛生検査所の指導を受けながら７と場に整備統合された経緯があります。

平成８年の腸管出血性大腸菌症（Ｏ－１５７）の発生を受け、と場の大幅な衛生設備の改善が指導され、これに伴い本島内のと場は沖縄県食肉センターと名護市食肉センターに再編統合され現在に至っています。

平成２４年には更なる衛生設備基準改善に対応するため、沖縄県食肉センター内の豚と畜ラインと山羊と畜ラインが食肉衛生検査所指導のもと最新の技術で設備が新設されています。

また、食肉衛生検査所の果たされている業績については日々のと畜検査のみならず、食肉センター設備の衛生基準の改善・衛生指導と合わせて、日々のと畜疾病情報について検査当日に家畜保健衛生所・生産農場へ届けられるシステムを構築していただいた事により、生産現場における疾病対応が大きくスピードアップされ、より健康な家畜の生産に結びついておりますし、食肉流通の現場ではより安全安心な食肉の流通に多大な貢献があるものと感謝をしております。

最後になりましたが、食肉衛生検査所の益々のご発展と職員一同様のご健勝をお祈り申し上げ、お祝いの言葉と致します。

創立４０周年を祝して

沖縄県食鳥協会
会長　赤嶺　浩

沖縄県食肉衛生検査所が４０周年を迎えられるに当たり、心からお祝い申し上げます。獣医師の先生方には、平素より消費者に安心・安全な鶏肉を供給するため食鳥検査業務にご尽力いただき厚く感謝申し上げます。

平成２５年からＴＰＰ交渉参加による関税引き下げが予想され、発動されると安価な鶏肉輸入が見込まれる一方で、配合飼料価格の高止まり、国内において高病原性鳥インフルエンザの発生等を踏まえ、国産鶏肉については、需要に対応した供給とともに、さらなる生産・流通の合理化による企業として再生産可能な鶏肉価格の水準を維持することが重要になってくる等、安全で高品質な沖縄県産鶏肉の安定供給は、益々重要となっています。

さらに最近ではサルモネラ、カンピロバクター等の鶏肉由来とする食中毒が増加するなど、食に対する消費者の関心が高まる中、生産・処理・流通が一体となって品質管理体制を構築し、鶏肉の衛生管理向上を図ることが重要であり、中でも食鳥処理場におけるＨＡＣＣＰの管理基準の向上を図る事は緊急の課題であります。

食の安心・安全は消費者の最大のニーズであり、これに応えることが生産・流通・販売を担当する者の使命であり、常に衛生管理の向上に傾注すべきだと考えます。

鶏肉は鮮度が大事であり、新鮮で美味しい沖縄県産若どりを安定供給してまいります。また、我々ども食鳥処理場におきましては、これまで以上に衛生面の充実を図っていく所存でございます。

今後とも、安心・安全な鶏肉の供給を目的とした検査制度に沿って、尚一層ご尽力をお願いしますと共に食鳥業界へのご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

最後に、食肉衛生の益々のご発展と職員一同様のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

創立 40 周年によせて

中央食肉衛生検査所 10 代所長/
北部食肉衛生検査所 7 代所長　　長田悦朗

中央食肉衛生検査所 11 代所長　　渡口政司

北部食肉衛生検査所 5 代所長　　比嘉健俊

北部食肉衛生検査所 6 代所長　　中島秀人

元中央食肉衛生検査所第 2 課長　　沢岻安晃

創立４０周年によせて

長田　悦朗
（中央食肉衛生検査所 10 代所長
・北部食肉衛生検査所 7 代所長）

沖縄県食肉衛生検査所創立４０周年を迎えお祝い申し上げます。

私は、本県が本土復帰後５年を迎える昭和５２年に食肉衛生検査所に採用されました。当時は所長も３０代後半、最高高齢者も４０代初頭という非常に若い職場でした。私が採用された時は、復帰後の混乱も収まり、職員の勤務状況も改善されていましたが、獣医師不足により、所長もと畜検査業務に携わることが多々ありました。

食肉衛生検査所の事務所は那覇市曙の貸しビルのワンフロワーを借り、そこで事務と細菌・病理等の試験検査を実施していました。今考えると、人畜共通感染症を民間ビルに持ち込みざるえない状況とはいえ随分乱暴なことをしていたと思います。

昭和５４年に大里村(現南城市)に検査所が新築され試験室、検査機器等が充実されたのを契機に精密検査体制の整備が求められました。当時の先輩たちは本土の検査体制に追いつけ追い越せを目標に人材育成に力を注いでくれたと感謝します。厚生労働省の「と畜検査員の研修コース（１ヶ月)」とは別に、検査所独自で予算を確保し「長期（１ヶ月）研修」を企画し、横浜市、東京都、群馬県、静岡県、富山県、大阪市などの食肉衛生検査所で微生物、病理の研修を受け入れて頂きレベルアップを図って参りました。

私も富山県食肉検査所で林信治・城石先生の指導のもと、病理研修を受けさせて頂きました。富山食肉検査所では、少人数ではありますが、林先生をトップに病理・微生物・理化学の業務が円滑に運営されており、沖縄県においても精密検査課の設置の必要性を強く感じました。

平成の時代に入りますと、食鳥検査制度の導入、群馬、宮崎、鹿児島県における「牛肉の対米輸出向けと畜場」の設置に伴い、食肉・食鳥肉の衛生確保、と畜場で枝肉汚染対策の重要性がクローズアップされ、ＨＡＣＣＰの考え方に基づくと畜場の衛生確保が重要なテーマになりました。

平成８年の腸管出血性大腸菌（Ｏ１５７）食中毒事件の発生を受け、食肉の衛生確保の観点からと畜場法の政令、省令の改正が行われ、と畜場の設備改善、衛生的な解体処理が義務化され、安全な食肉が提供できる体制が整いました。

平成１３年に、我が国で初めて牛海綿状脳症（ＢＳＥ）が発生し、全国一斉

に牛の全頭検査が実施されました。本県においても、多少の混乱はありましたが、本庁主管課及び検査員の努力により、比較的スムーズに検査を実施することができました。

本県においては、検査業務の効率化・円滑化を目的に県全体（離島を含む）のＢＳＥ検査を中央食肉衛生検査所で実施することとしました。ＢＳＥ検査に伴い検査員の増員を要求するとともに、中央食肉衛生検査所の試験機能の充実強化を図るため、新たに精密検査課を設置することができました。

グローバル化に伴い、鳥インフルエンザ、口蹄疫等の再興感染症、動物由来の新興感染症対策と様々な感染症対策が食肉衛生検査所に求められる時代になっております。

これからも沖縄県食肉衛生検査所が発展するとともに、皆様方のご健勝とご活躍を祈念申し上げます。

４０周年記念誌発刊に寄せて
食肉衛生検査所での思い出と食肉衛生検査所への思い

渡口　政司
（中央食肉衛生検査所 11 代所長）

食肉衛生検査所創立４０周年を迎え心からお祝い申し上げます。
私は昭和５０年４月１日に採用され沖縄県食肉衛生検査所に配属されました。当時の食肉衛生検査所は昭和４９年に設立されたばかりで、本所と北部支所がありました。いずれの事務所も民間のビルやアパートに仮住まいしており、本所は那覇市曙のとみはまビルでしたが、精密検査に必要な機器・器具なども不十分でましてや専用の部屋もない状況でした。

しかし、当時の所長、課長等の計らいで若い検査員を全国食肉衛生検査所協議会の病理部会や横浜市、群馬県等の検査所へ研修に積極的に参加させてくれたおかげで技術の向上が図られました。

その一つが、昭和５７年の豚の腸炭疽発生です。この事例は豚のカンピロバクター腸炎調査中での出来事でした。那覇市安謝のと畜場からカンピロバクター腸炎を疑う豚数頭の内臓が午後４時ごろ検査所に持ち込まれました。所見を取っているときにその中の１頭について腸炭疽を疑い精密検査を行い、関係機関と連携し３日後に真性腸炭疽と判定しました。検査結果がでるまでの間は、と畜場を閉鎖し、と畜場及び養豚場の消毒、搬入豚及び飼育豚の観察が行われました。

平成４年度から導入された食鳥検査制度についても、県内のブロイラーを処理している食鳥処理場２か所、養鶏場に隣接された食鳥処理場（認定小規模食鳥処理場）の調査、検査制度導入のための説明会等を開催したことが思い出されます。

所長時代には、平成１９年度全国食肉衛生検査所所長会議・第４７回全国食肉衛生検査所協議会全国会議を那覇市で開催しました。その時はそれまで一部廃棄措置されていた豚赤痢が平成１６年度に改正されたと畜場法により全部廃棄となったことからその対応について本会議で活発な意見が交わされました。

さらに思い出深い事例が平成２０年１２月２７日に発覚しました。

経緯：平成２０年１２月２４日に沖縄県食肉センターでとさつされた豚が内臓検査の際、サルモネラ・コレラスイスに感染の疑いがあったため、精密検査を行うため保留ラインに移され「保留」と記された札（保留札）がかけられた。ところが、この保留札が何らかの原因で外れてしまい、当該枝肉は誤って出荷ラインに戻された。２７日の午後に精密検査の結果サルモネラ・コレラスイス陽性が確定し、サルモネラ症として全部廃棄処分をしようとしたところ、当該枝肉は他の正常枝肉とともに部分肉にカットされ午前中に県内スーパー２１店舗に出荷されていた。そこですぐに店頭販売を止めてもらったが、感染豚を区別することができず、関連業者の協力のもと出荷された１３５頭分の豚肉を全て回収し処分することとなった。

この事件は、検査所とと畜場管理者側との確認事項の連絡体制が徹底されていなかったこと、また、常なる検証業務をお互いが出来ていなかったことにより起こったものです。この事例以後は、常に検証・確認を怠らないよう業務体制の見直し・改善を進め消費者に食肉の安全安心が示せる体制がとられるようになりました。

以上、これまで４０年間を振り返って述べてまいりましたが、当検査所が設立以来ここまで立派に成長してきたのは歴代の所長をはじめ、諸先輩方の並々ならぬご尽力と多くの関係者の支援があったからこそなし得られたものと思います。
あらためて心より敬意を表す次第です。
今年は新しい庁舎になると聞いております。これからも、県民、消費者に安全で安心な食肉・食鳥肉の提供ができるように御尽力くださいますようお願い致します。
最後に食肉衛生検査所の更なるご発展を祈念するとともに、職員一同のご健勝とご活躍を期待しております。

国際標準の食肉衛生

比嘉　健俊
（北部食肉衛生検査所５代所長）

私は、県庁職員として採用当初、保健所で食品衛生監視員として業務に携わっていました。営業施設の許認可及び食品による危害の発生を未然に防止するための衛生監視指導が主な仕事です。

食品による危害の中でも病原微生物による食中毒をいかに防止するかが重要ですので、食品衛生講習会の開催、食品の収去検査、機械器具の拭き取り検査等を実施し、食中毒の発生原因となる病原微生物制御に努めてきました。

その後、食肉衛生検査業務に携わることになりましたが、当時のと畜場は、出入り口のドアがなかったり、施設の補修や清掃も不十分で汚いというのが最初の印象でした。

と畜検査員及びと畜業務従事者は、血液や消化管内容物で汚れた繊維製品の手袋（軍手）をなんの躊躇いもなく使用している現場の状況に違和感を覚えました。同時に保健所との衛生に対する考え方の違いに愕然としたものです。

当時のと畜検査業務は、疾病り患獣畜の排除が中心で、人に危害を及ぼす食中毒菌等の微生物制御に対する危機感が希薄だったと思います。

と畜検査業務で、微生物制御の重要性が認識されるようになったのは、平成８年腸管出血性大腸菌 Ｏ１５７による健康被害が全国的に多発し大きな社会問題となったことです。

厚労省は、食中毒の原因となる有害微生物による食肉の汚染を防止する目的で、と畜場法政省令及びと畜検査実施要領を改正し、県内の各と畜場も法の基準に則った衛生的施設に全面的に改築されました。

ソフト面では、軍手の使用禁止、使用するナイフの温湯消毒等、衛生的なと畜解体処理が実施され、食肉衛生に対する意識も大きく変化し安全性が格段に向上してきました。

Ｏ１５７の発生は、我が国のと畜検査に微生物制御という新たな考え方を導入した変革期だったように思います。

本県は、地理的に東南アジアに近く、航空貨物輸送の利便性の高まりもあって、近年、香港等に県産肉の輸出が増加しつつあります。その要因の一つとして県内と畜場の整備が進み、安全で衛生的な食肉が生産されるようになったことだと思います。

今後とも、継続して海外に県産肉を輸出するには、国際基準に見合った食肉の衛生管理が求められます。

最後になりましたが、食肉衛生検査所の益々のご発展と職員皆様のご健勝を祈念いたします。

祝　　辞

中島　秀人
（北部食肉衛生検査所６代所長）

沖縄県食肉衛生検査所が、創立４０周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。

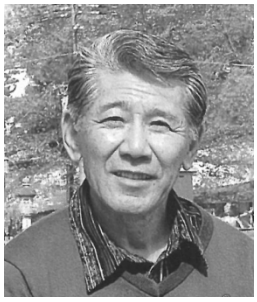
４０年の間にはいろいろな出来事がありました。復帰当時は日本国の法律施行に合わせ諸先輩方のご苦労されたことと思います。

琉球政府時代には数多くあったと畜場も沖縄本島では６ヶ所に整備され検査員も農林部から厚生部に移り職員の確保，検査体制の強化等、諸先輩方の努力があり私が昭和５３年に入職した当時は沖縄県に復帰して６年目ぐらいの時でしたのでさほど苦労もせず業務をこなすことが出来ました。また、昭和５４年には新庁舎に移転し検査業務はもちろん精密検査体制の強化充実を図り労働しやすい環境ができたと思います。

その後と畜場も統合され平成１６年には沖縄本島には２カ所の食肉センターとなりました。

そのひとつである北部食肉センターと１カ所の食鳥処理場を受け持つ北部食肉衛生検査所に平成１７年に所長として着任しました。最新の設備を備えた食肉センター、職員の確保も充実し試験室の機器整備も中央食肉衛生検査所と一部を除いて同等の状況であったことから当検査所内であらゆる事に対応することが出来たと思っています。

おわりに、食肉検査所のますますのご発展を祈願するとともに職員のご活躍を期待します。



ふりかえって

沢岻　安晃
（元中央食肉衛生検査所第２課長）

創立４０周年おめでとうございます。

昭和４９年に那覇市安謝の地で産声をあげてはや４０年、これも一重に関係各位のご尽力の賜物だと感激しています。

ふりかえってみますと、小生は昭和５０年５月１日付けに沖縄総合事務局より割愛採用になりました。この時代は、当検査所は人員不足で他府県より応援の職員が来ている状況で、施設も民間ビルの間借りで粗末なものでした。赴任して初めての全体会議があまりにも雑で、本当に最高学府を出た人達の集まりかとびっくりしましたが、これは出来て間もない為で発展途上の一過程であったと思います。

その後昭和５４年３月に現在の大里に新築移転し、施設設備も充実し検査体制も整い隔世の感がしました。

さて、当時で楽しかったことは、３者協によるスポーツ大会へのソフトボールでの参加です。食検は部内で１０連覇、県大会も優勝し念願の九州大会に参加し、県勢初の２得点はしたものの、沢岻監督の采配不足で６－２で敗戦しましたが、翌日は雨天のため優勝チームはなしと言う結果となり、皆でまた次回に向けてと夢を馳せたものです。

又、１月当初に奥武山公園で開催されていた県環境保健部及び県職労環境保健支部共催の新春駅伝大会も終了後の懇親会が楽しく、これらは職場と職員の団結力を高めるのに大変に役立ったものと思います。

仕事の面では、と畜場法改正による全国一斉の施設改善の時に沖縄には専門の業者がいなくて、期限内に間に合わすのに苦労したこと、牛の施設の新築計画進行中に、沖縄県では発生はなかったがＢＳＥの問題が加わり難航しましたが、平成１５年２月に無事に出来上がったときには本当にホッとすると同時に関係者との協調の大事さを痛感しました。

さて、あれこれと沢山ありましたが退職辞令は絶対にこの食検で貰うものと心に決めていた通りに実現し、再任用２年、嘱託７年と嬉しいオマケまでつきました。

これも一重に関係職員の皆様の温かいご支援と御協力のお陰だと心より感謝しています。

最後になりましたが、当検査所が今ある技術と知識を更に研鑽し、食肉の安全と安心に大いに寄与し、益々発展していくものと固く信じて止みません。

40 年間のあゆみ

１．　食肉衛生検査所 40 年間のあゆみ

２．　と畜検査等 40 年間の推移（統計）

（１）　と畜検査頭数の推移

（２）　40 年間のとさつ禁止頭数

（３）　40 年間の全部廃棄頭数

（４）　22 年間の食鳥検査羽数

３．　調査研究 40 年間の発表状況

４．　歴代所長名

凡　　例

1　統計資料には次の略字を用いた。

センター	:(株)沖縄県食肉センター
畜試	:畜産試験場（現　畜産研究センター）
中部	:中部食肉センター（株）
真玉橋	:（株）真玉橋食肉センター
北部食肉センター	:（株）沖縄県北部食肉センター
沖畜	:沖縄畜産工業(株)
ミート	:(株)那覇ミート
久米島	:久米島食肉センター
南部	:(株)沖縄県南部食肉センター
協同	:沖縄県協同食肉(株)
名護分工場	:(株)沖縄県食肉センター名護分工場
名護センター	:名護市食肉センター
沖畜	:沖縄畜産工業(株)
GP センター	:(株)沖縄県鶏卵食鳥流通センター

2　p28～38 調査研究発表の表では、北部支所所属を「（北部支所）」、北部食肉衛生検査所所属を「（北部）」と表記。（　）がない場合は沖縄県食肉衛生検査所、もしくは中央食肉衛生検査所所属。

１．　食肉衛生検査所 40 年間のあゆみ

沖縄県食肉衛生検査所は昭和 49 年 4 月に那覇市曙町に設置され、同年 6 月に名護市に北部支所が開設されました。

当時は、昭和 47 年 5 月 15 日に沖縄が日本復帰を果たした直後で、県内に 32 カ所あったと畜場は日本国のと畜場法の構造設備基準に適合させるため、昭和 48 年 5 月 14 日までの執行猶予期間内に施設改善や整理統合を経て 12 カ所に整理されたところでした。

執行猶予期間中の各と場への指導は熾烈な様相を示し、当時の様子を大城章信氏は「･･･未整備と畜場への検査員の派遣を拒否（業務命令拒否）し、業界との乱闘・混乱を避けるために官公労共済会館で合同宿泊しながら、整備された沖縄県食肉センターの検査には、パトロールカーの先導により、全員トラック送迎による･･･（中略）･･･県庁にも警察機動隊が導入され険悪な様相を呈しておりましたが、我々検査員は、と畜場の施設整備による自然環境保全、県民・消費者保護のための食肉衛生行政の理念と提言、待遇改善等の要望が貫徹できない場合は全員辞職する覚悟で･･･」当局と調整を行ったと記しています（平成 15 年度事業概要より抜粋）。

食検設立当初の所管と畜場数は本島に 7 カ所（南部食肉センター、那覇ミート、沖縄畜産工業、真玉橋食肉センター、沖縄県食肉センター、北部食肉センター、中部食肉販売）、周辺離島に 2 カ所の簡易と場（久米島と畜場（その後一般と畜場久米島食肉センターに移行、昭和 60 年から那覇保健所に移管）、南大東と畜場（休業中、その後廃止））があり、年間のと畜頭数は総頭数 298,858 頭（豚 297,153 頭、牛 1,076 頭、山羊 610 頭、馬 19 頭）でした。職員構成は本所 2 課制 30 名、支所 6 名、嘱託 5 名、さらに本土先進県からの派遣職員が 3 名いました。

設立当初の食検は曙のとみはまビルの一角、北部支所は名護市内の民間ビル 2 階を借用していましたが、試験検査設備の限界に加え、公衆衛生上の観点から民間建物内の試験検査は不適正かつ危険であることから、食検は昭和 54 年 3 月に大里村に新築移転し、北部支所は昭和 57 年 3 月に名護市世冨慶に新築移転しました。以降、各検査所では検査機器等が徐々に整備され、肉眼検査では判定が困難であった症例も試験検査で確実に判定できる体制が整えられました。

その後北部支所は平成 2 年に道路拡張に伴い名護市名護に移転改築し、さらに平成 5 年に北部合同庁舎内に移転し現在にいたります。また、北部支所は平成 6 年の行政改革により北部食肉衛生検査所となり、同時に食検は中央食肉衛生検査所となりました。

と畜場は統廃合がさらに進み、平成元年までには一般と畜場 5 カ所（沖縄県食肉センター、真玉橋食肉センター、沖縄畜産工業、中部食肉センター、沖縄県協同食肉）及び簡易と畜場 1 カ所（畜産試験場）まで減少しました。総と畜頭数はこの頃ピークをむか

え、平成元年の総と畜頭数は 493,520 頭でした。職員構成は本所 4 課制 36 名と北部支所 5 名、嘱託 6 名でした。

平成 4 年 4 月 1 日より食鳥処理事業者の事業の規制及び食鳥検査に関する法律（以下「食鳥検査法」）が施行され、管内では 4 カ所の食鳥処理場（(有）中央食品加工・沖縄畜産（株）・（株）沖縄県鶏卵食鳥肉流通センター・沖縄食鶏加工（株））において食鳥検査体制が整えられました。その後沖縄畜産（株）は廃業し、現在は 3 カ所の食鳥処理場及び 20 カ所の認定小規模食鳥処理場を所轄しています。

平成 8 年の学校給食などによる腸管出血性大腸菌 O-157 事件の連続発生をうけ、翌年にはと畜場法が改正されました。腸管出血性大腸菌が存在するとされる牛等の腸管内容物や体表の汚れによる食肉の汚染を防ぐために、使用器具の 1 頭毎の洗浄・消毒、直腸や食道の結紮、衛生管理責任者の設置、作業の記録の保存など施設基準や作業の見直しが行われたことから、施行期限の平成 12 年（牛）、平成 14 年（豚）を前に、沖縄畜産工業(株)、(株)真玉橋食肉センター、その頃北部の食肉センターを運営していた(株)沖縄県食肉センター名護分工場、さらには(株)沖縄県食肉センターの山羊処理施設が、相次いでと畜場を廃止しました。

平成 13 年 9 月に国内で初めての BSE が発生したことにより、翌月の 10 月 18 日から BSE の全頭検査が始まりました。沖縄県では、沖縄本島以外の離島各所のと畜場を含めた 4 カ所（現在は 6 カ所）の牛の BSE 検査（平成 17 年から山羊・めん羊も加わる）を中央食検で一手に担うことになり、急遽専用試験室や必要な検査機器の整備、検体の輸送方法の調整が関係機関と行われました。各現場では BSE 検査結果が翌日に判明する事も含め、特定危険部位の適正な処理方法や個体識別方法についての対応が協議されました。なお、平成 25 年 7 月に BSE 検査対象は牛が 48 ヶ月齢超になり、月例区分によって特定危険部位もかわり、各と畜場で分別管理に関して再度協議がもたれました。山羊の検査対象月齢は 12 ヶ月超です。

平成 15 年 2 月には沖縄県食肉センターに新たな大動物処理施設が完成し、同年 4 月には名護市食肉センターが操業を開始し、2 年ぶりに北部地域でのと畜が可能となりました。これをうけて同月中部食肉センターが廃業しました。相次ぐと畜場の閉鎖や小規模養豚場の廃業が続いたことから、平成元年のピーク時に比べ平成 17 年には総と畜頭数が 32 万頭まで減少しましたが、以降は横ばいの状況です。平成 23 年に沖縄県食肉センターが豚及び山羊の処理施設を新設したことから、山羊のと畜頭数がそれまでの 2 倍に伸び、豚や牛も各地のご当地ブランドが増え、今後も現状が続くと思料されます。

試験室関係では、中央食検、北部食検ともに年々設備を充実させ、また、職員を積極的に研修に派遣する等検査技術の研鑽及び情報収集に努めています。平成 9 年からは食品衛生検査施設の一つとして理化学検査に GLP が導入され、食肉のみならず県内の食品の残留抗菌性物質検査も行っています。微生物室関係では昭和 57 年に全国で初めてと畜場で発見された豚の腸炎型炭疽症例を発表したことを筆頭に、レプトスピラに関す

る抗体保有調査（平成 5 年）、抗酸菌症の判定（平成 15 年・16 年）、サルモネラ症の迅速診断（平成 21 年）などの調査研究を全国に向けて発表しています。

病理・寄生虫分野では住肉胞子虫症の調査研究（平成 4 年）、トキソプラズマ症の報告（平成 14 年）、豚抗酸菌症の病理学的考察（平成 21 年）、山羊の肝細胞癌（平成 14 年）や鶏のリンパ腫性腫瘍病変（平成 22 年）、山羊の毛包虫症（平成 24 年）、アクチノバシラスによる豚肝炎の報告（平成 25 年）などを全国技術研修会の場で発表しています。

平成 13 年の BSE 検査開始に伴い、平成 15 年に中央食検の検査体制が変わり、それまで現場毎の 3 課制であったものが、検査第 1 課（食鳥検査担当）と検査第 2 課（食肉検査担当）、そして新たに精密検査課が設けられました。このことでより専門性の高い検査体制が可能となり、また、各現場の職員はより衛生指導に力をいれることが可能となりました。

平成 18 年に沖縄県行政組織規則により課制が班制となり、中央食検 3 班制、北部食検は班制なしとなりました。現在、職員定数は事務職含め中央食検 32 名、北部食検 15 名、嘱託 6 名で、管轄は 2 と畜場、1 簡易と畜場、3 食鳥処理場、20 認定小規模食鳥処理場を所轄しています。

と畜場の状況や食肉をめぐる情勢はここ 15 年間でめまぐるしく変化しています。今年もと畜場法及び食鳥検査法が一部改正され、次年度より衛生管理体制が従来の一般衛生管理か HACCP 方式かの選択制となります。将来的には全ての施設で HACCP 方式を取り入れることとなると思料されます。加えて鳥インフルエンザや口蹄疫などの地域全体を巻き込む家畜伝染病の発生も予断を許しません。鳥インフルエンザに関しては毎年、各食鳥処理場での机上演習・実動演習等をおこなっているところです。

最後に、中央食検は庁舎の老朽化により今年 9 月に同敷地内に新築移転しました。「食肉の安全を確保する」ために設立当初より日々邁進してきた精神を変わらず持ち続け、40 周年の節目を迎え新たな庁舎環境の中で今後も科学的根拠に基づく食肉検査・食鳥検査に努めてまいります。

記念誌として、次頁以降に過去 40 年間の統計をとりまとめました。

２－（２）　40年間のと殺禁止頭数（豚）

（豚）

疾病別		豚丹毒	破傷風	そ細の菌他病	トプラキズマソ病	膿毒症	敗血症	黄疸	尿毒症	中毒諸症	熱性諸症	その他
年度	計											
S49	304											304
S50	801	169	1		472	20	2			1		136
S51	267	33			95	28		1				110
S52	256	42		11	54	12						137
S53	173	47		1	50	21	9	5				40
S54	69	31			5	4	2	1				26
S55	38	27			1	8						2
S56	11	1			1	1	1					7
S57	17	4			2	6	5					
S58	45	20			2	16	1					6
S59	49	12			2	20	1					14
S60	36	7			3	14	4		1			7
S61	67	3			4	23	9					28
S62	42	4				24	2					12
S63	105	18		1	4	30	4					48
H1	105	4			1	48	7					45
H2	92	1			1	50	6	1				33
H3	51	2				23	4					22
H4	87	5				29	3					50
H5	42	1				15	4					22
H6	36	2				15	1					18
H7	39	4				16						19
H8	31	3				12						16
H9	36	13				8	3					12
H10	54	13				20	3					18
H11	34	15				10						9
H12	60	24				18	1				17	
H13	61	28				24	1					8
H14	49	24				21					4	
H15	24	15				5					4	
H16	46	39				1					6	
H17	17	11				2					4	
H18	15	10				1					4	
H19	17	13									4	
H20	18	13			1						4	
H21	30	25				1					4	
H22	15	11				1					3	
H23	15	11				3					1	
H24	20	16				3					1	
H25	7	7										
総計	3,281	728	1	13	698	553	73	8	1	1	56	1,149

２-（２）　40年間のと殺禁止頭数　（牛・馬・山羊）

（牛）

疾病別		膿毒症	敗血症	黄疸	尿毒症	熱性諸症	その他
年度	計						
S49	0						
S50	3	1					2
S51	0						
S52	1						1
S53	0						
S54	0						
S55	0						
S56	0						
S57	2						2
S58	0						
S59	0						
S60	3						3
S61	0						
S62	1						1
S63	0						
H1	4		2				2
H2	5	1	1				3
H3	33	9					24
H4	5		1				4
H5	11						11
H6	19	1					18
H7	4						4
H8	6		1				5
H9	14		1				13
H10	16						16
H11	9						9
H12	5					3	2
H13	7	2					5
H14	3			1		2	
H15	3			1		1	1
H16	7			1	2	4	
H17	2			1		1	
H18	3				1	2	
H19	2					2	
H20	0						
H21	3			1		2	
H22	6			1	5		
H23	3			2	1		
H24	5			1	3		1
H25	0						
合計	185	14	6	9	12	17	127

（馬・山羊）

疾病別		膿毒症	敗血症	尿毒症	破傷風	黄疸	その他
年度	計						
S60	2				1		1
S61	1						1(結核病)
H2	1						1
H4	1	1					
H6	1	1					
H10	1						1
H11	1		1				
H16	1					馬1	
H24	1			1			
合計	10	2	1	1	1	馬1	4

＊馬はH16年度の黄疸のみ。他は全て山羊。
＊表示されていない年度はと殺禁止なし。

２－（３）　40年間の全部廃棄頭数　　（豚）

（豚）

疾病別		豚丹毒	サルモネラ症	トプラキズマソ病	膿毒症	敗血症	尿毒症	黄疸	水腫	腫瘍	変性	白血病	細菌性その他	原虫病その他	炭そ	その他
年度	合計															
S49	819	44		745	10	4		4			1					11
S50	456	14		404	24	3		5			1					5
S51	258	17		210	23	2		5								1
S52	309	14		251	26	6		4		1	1					6
S53	355	20		298	18	4		9		1	2					3
S54	322	15		287	11	1	1	3		2						2
S55	378	10		319	26	6		14			3					
S56	349	18		240	40	22	1	10		1	1				1	15
S57	365	25	7	244	51	19		11		1		6				1
S58	325	46	5	195	43	12	3	10		2	2	5				2
S59	307	45	3	149	94	3	1	8			1	3				
S60	244	45	2	116	53	12		9		1	2	4				
S61	219	18	2	84	78	14		17		2	1	3				
S62	247	24	1	67	100	30	1	18		1	4	1				
S63	277	27		64	102	54		14	1	1	9	5				
H 1	201	34		9	77	54		13		4	5			4		1
H 2	197	15		12	67	53	1	13		1	2			31		2
H 3	217	23		16	66	36	1	10		1	3			60		1
H 4	198	39		3	52	41		17		1	4			37		4
H 5	134	9		13	48	13	1	9		1	6	2		32		
H 6	176	21		3	55	27	2	13		2	3	1		49		
H 7	262	29		11	134	28	1	15		5	7	1		31		
H 8	210	22		8	74	47	2	15	2	2	5	2		31		
H 9	231	59		37	55	14		19	2	3	9			33		
H 10	254	49		29	80	33	2	14		5	10	1		31		
H 11	394	100		38	123	65	1	10		4	26			27		
H 12	287	129		27	54	37	2	4		4	7			23		
H 13	256	73		87	40	22		5	1	3	8	2		15		
H 14	224	69		39	45	33		9		3	9	2		15		
H 15	342	56		33	37	154		9	1	5	13			34		
H 16	608	86		58	24	226		4	1	3	5		178	23		
H 17	244	63		17	24	85		2	1	4	4	1	37	6		
H 18	397	59		46	29	230		3		4	6		14	6		
H 19	293	99		50	20	73		4		2	12		27	6		
H 20	431	88	163	78	27	41		3		3	13	1	2	12		
H 21	434	172	85	82	33	25		1		12	6	1		17		
H 22	323	48	106	88	15	17		3		26	4	3		11		2
H 23	345	82	109	82	20	18			1	8	6	5		12		2
H 24	390	97	155	73	9	37	1	1		5	6	1		5		
H 25	311	75	133	40	5	40		2		6	1	4		5		
合計	12,589	1,978	771	4,652	1,912	1,641	21	339	10	130	208	54	258	556	1	58

２－（３）　40年間の全部廃棄頭数　（牛・山羊・馬）

（牛）

疾病別 年度	計	膿毒症	敗血症	尿毒症	黄疸	水腫	腫瘍	変性	白血病	その他
S49	0									
S50	0									
S51	0									
S52	0									
S53	3	1			2					
S54	0									
S55	1	1								
S56	5		2					1		2
S57	12	1	7		3	1				
S58	10	3	5				1			1
S59	2	1	1							
S60	2		1						1	
S61	20	8	6		3	2			1	
S62	29	6	12			2		8	1	
S63	37	7	17	1	1	9	1	1		
H1	25	8	6	1	1		1	8		
H2	29	5	15		4			3		2
H3	18	2	13			1		2		
H4	14	1	7					5		1
H5	8	4			1	1		2		
H6	9	2	4					2	1	
H7	13	3	5		1				4	
H8	11	2	7	1					1	
H9	10		4		1	1	1	3		
H10	9	3	2				1	2	1	
H11	7	1	3				1	2		
H12	15		9			2	1	3		
H13	10	4	2			1	1	2		
H14	9		2	1	1	2		1	2	
H15	6			2	1	1	1	1		
H16	8		3			1	1		3	
H17	13		1		1		4		7	
H18	10	1	4				4		1	
H19	9						3	2	4	
H20	12		2		2	1	5		2	
H21	21	1	4		1	1	12	1	1	
H22	15	1	5	1		1	7			
H23	7	2	2				3			
H24	13		3				1		9	
H25	12	1	4						7	
合計	434	69	158	7	23	27	49	49	46	6

（山羊）

疾病別 年度	計	膿毒症	敗血症	水腫	腫瘍	変性
S59	1	1				
H1	1					1
H2	1		1			
H3	1	1				
H4	1	1				
H5	2	2				
H6	1	1				
H7	2	2				
H9	1	1				
H10	3		2			1
H11	3	1	1		1	
H12	2	1		1		
H13	2		1			1
H14	2		2			
H17	3	3				
H18	1	1				
H22	2			1		1
H24	2	1	1			
H25	1					1
合計	32	16	8	2	1	5

（馬）

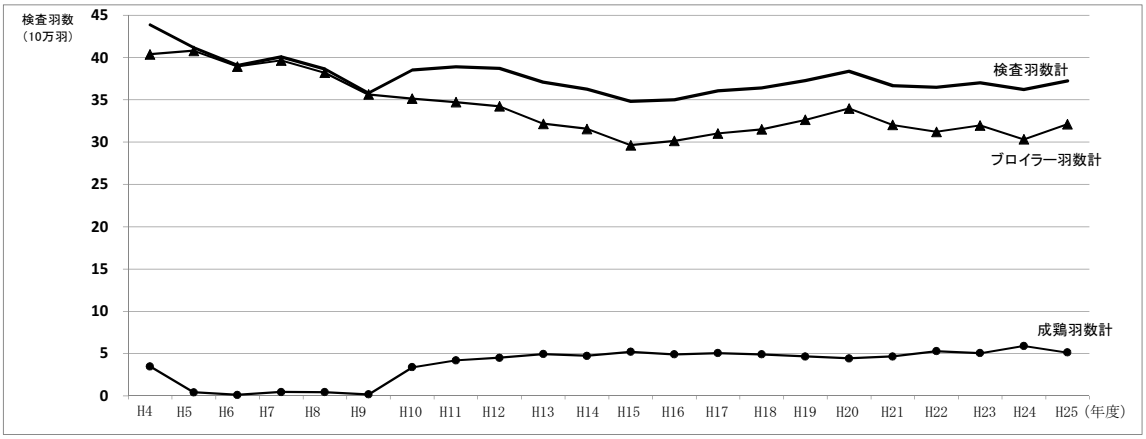
疾病別 年度	計	膿毒症	敗血症	腫瘍	変性
H2	1		1		
H7	1			1	
H8	1	1			
H12	1			1	
H13	1			1	
H15	2			2	
H16	3			3	
H19	1			1	
H23	1				1
合計	12	1	1	9	1

＊山羊及び馬は該当年度のみ記載。

２－（４）　２２年間の食鳥検査羽数

年度	計	ブロイラー	成鶏	沖縄食鶏加工㈱		中央食品加工株式会社			GPセンター		沖縄畜産株式会社		
				ブロイラー	成鶏	ブロイラー	成鶏	あひる	成鶏	あひる	ブロイラー	成鶏	あひる
4	4,384,395	4,037,116	347,277	1,758,886		1,401,617		2	347,277		876,613		
5	4,119,050	4,078,705	40,312	1,839,063	3,804	1,407,504		33	36,508		832,138		
6	3,905,108	3,893,930	11,072	1,722,184		1,290,746	11,072	106			881,000		
7	4,009,352	3,964,523	44,811	1,735,786	7,509	1,338,767	4,678	1			889,970	32,624	17
8	3,862,041	3,819,702	42,310	1,652,242	15,361	1,387,956					779,504	26,949	29
9	3,578,229	3,561,154	17,070	1,976,909	17,070	1,493,283		5			90,962		
10	3,851,740	3,513,590	338,080	2,044,214		1,469,376		70	338,080				
11	3,890,848	3,471,105	419,713	2,102,981		1,368,124	5	30	419,708				
12	3,870,168	3,420,986	449,182	2,051,335	17	1,369,651			449,165				
13	3,708,680	3,215,256	493,411	1,862,496	7	1,352,760		13	493,404				
14	3,627,100	3,155,564	471,536	1,763,637		1,391,927			471,536				
15	3,480,837	2,961,289	519,548	1,677,356		1,283,933			519,548				
16	3,501,926	3,013,077	488,849	1,730,234		1,282,843			488,849				
17	3,606,431	3,102,116	504,315	1,758,121		1,343,995			504,315				
18	3,638,641	3,148,734	489,907	1,791,472		1,357,262			489,907				
19	3,727,409	3,263,444	463,965	1,793,540		1,469,904			463,965				
20	3,838,860	3,396,409	442,433	1,878,739		1,517,670			442,433	18			
21	3,667,242	3,202,387	464,850	1,835,016		1,367,371			464,850	5			
22	3,648,463	3,121,703	526,760	1,788,971		1,332,732			526,760				
23	3,700,779	3,196,881	503,898	1,822,916		1,373,965			503,898				
24	3,622,571	3,032,488	590,083	1,788,576		1,243,912			590,083				
25	3,723,297	3,212,152	511,145	1,756,989		1,455,163			511,145				
計	82,963,167	74,782,311	8,180,527	40,131,663	43,768	30,300,461	15,755	260	8,061,431	23	4,350,187	59,573	46

※平成６年～平成９年　GPセンターが処理羽数減少のため認定小規模食鳥処理場。
※平成９年5月　沖縄畜産(株)廃業



３．調査研究４０年間の発表状況

年度	学会、研修会名	発表演題名	発表者名
昭和49年	業務報告会(1回)	と畜場における豚の脊椎膿瘍の調査結果について	比嘉 次郎(北部支所)
		と畜検査時における廃棄について	屋比久 進(北部支所)
		と畜場における豚肺虫の検索	花城 康永
		家畜衛生試験場における研修について	安里 学
		と畜場に搬入される豚,牛,山羊のHA抗体調査	比嘉 次郎(北部支所)
		豚のTP抗体調査と清浄化対策について	浦崎 民雄
		と畜検査における生体検査について	名幸 方光(北部支所)
		と畜場における豚の肺,肺門リンパからのTPの検出	天久 勇市
		横浜食肉衛生検査所における研修報告	比嘉 次郎(北部支所)
	県衛生監視員研究発表会(7回)	食肉の細菌汚染について	大城 章信(北部支所)
	県獣医学会(5回)	と畜検査で見られた三病例について	森根 庸夫
昭和50年	業務報告(2回)	食肉の細菌汚染について	屋比久 進(北部支所)
		疾病の病変状について	大城 章信(北部支所)
		健康豚の肝からのサルモネラ検出について	本田 善美
		北部食肉センターにおける豚の疾病について	大城 章信(北部支所)
	県獣医学会(6回)	と畜検査よりみた豚疾病の実態について	仲田 安雄
		北部食肉センターに搬入される豚,牛,山羊のTP,HA抗体調査成績	比嘉 次郎(北部支所)
		広島市と畜場における豚のトキソプラズマ抗体調査及びマイクロタイター法の実施について	本田 善美
昭和51年	研究報告	と畜場に於ける豚肺虫の検索	花城 康永
		豚の炎症性疾患に関する調査(第一報)	城間 秀栄
		豚の炎症性疾患に関する調査(第二報)	城間 秀栄
		豚の胃潰瘍調査について	小野寺 至(北部支所)
		豚の膿瘍に関する調査(第一報)	金城 清二
		豚の膿瘍に関する調査(第二報)	金城 清二
		豚の心内膜血腫,水疱の細菌検索について	大城 章信(北部支所)
		と殺豚の肝実質からのサルモネラ検出について	下川 信博
	県衛生監視員研究発表会(8回)	食肉検査よりみた豚疾病の実態について	仲田 安雄
		と畜場に於ける豚肺虫の検索	花城 康永
		豚の胃潰瘍調査について	小野寺 至(北部支所)
		豚の炎症性疾患に関する調査(第一報)	城間 秀栄
		豚の膿瘍に関する調査(第一報)	金城 清二
		豚の心内膜水疱,血腫の細菌検索について	大城 章信(北部支所)
		と殺豚の肝実質からのサルモネラ検出について	下川 信博
		と畜検査時に見られる豚の疾病(6例)の肉眼的病理組織学的所見	比嘉 次郎(北部支所)
	県獣医学会(7回)	豚の膿瘍に関する調査(第二報)	金城 清二
		と畜場における豚の検査成績とその主な疾病の動向について	仲田 安雄
		と殺豚の顎下リンパ節の結核様病変からの菌分離について	本田 善美
		豚の炎症性疾患に関する調査(第二報)	城間 秀栄
		豚の胎児性腎腫について	比嘉 次郎(北部支所)
	獣医公衆衛生学会(九州)	と殺豚の下顎リンパ節の結核様病変からの菌分離について(第一報)	本田 善美
昭和52年	業務報告会(4回)	正常豚のビリルビン平均値	大城 文雄
		と殺豚の肝実質からの*Salmonella*検出について	本田 善美
		豚の膿瘍に関する調査(その三)	当山 晴朗
		山羊のT・P症に関する研究	天久 勇市
		と畜検査時にみられる病変について	屋比久 進(北部支所)
		黒色腫について	大城 章信(北部支所)
	県獣医学会(8回)	と畜検査時に発見した豚のリンパ肉腫について	比嘉 次郎(北部支所)
		豚の悪性黒色腫について	大城 章信(北部支所)
		豚の膿瘍に関する調査(その三)	当山 晴朗
		と殺豚の肝臓実質から,分離同定した*Salmonella*について	本田 善美
		沖縄県内1と畜場において山羊より分離したトキソプラズマについて	天久 勇市
昭和53年	業務報告書(5回)	と畜場でみられる牛の疾病について	屋比久 進
		と畜の黄疸に関する調査(第一報)	渡口 政司
		と畜場でみられる豚の線維素性胸膜炎に関する調査(第一報)	安里 学
		食肉中の抗菌性物質検査について	浦崎 民雄
		トキソプラズマ,ビバリー株感染マウスの血清中抗体の経時的変化とシストの検出状況ついて	上地 俊秀
		豚Tp症の病理組織所見	安里 学
		豚膿瘍由来グラム陰性桿菌および嫌気性菌の同定	金城 清二
		PC.SM.CP.OTC.TR等についての*S.lutea, B.subtilis, B.cereus*の抗菌スペクトル(enhifition.fattern yore)について	名幸 方光(北部支所)
		ブタ由来について *Yersinia enterocolitica*	上地 俊秀
	県公衆衛生学会(10回)	食肉中の抗菌性物質残留調査のための予備実験(その2)	名幸 方光(北部支所)

年 度	学会、研修会名	発　　表　　演　　題　　名	発表者名
昭和53年	県公衆衛生学会(10回)	*S.lutea. B.subtilis.B.cereus*を用いた抗生物質5種の阻止径パターンについて	
		*Yersinia enterocolitica*の調査(その一)	上地　俊秀
		豚トキソプラズマ症の病理組織所見	安里　学
	県獣医学会(9回)	と畜場における牛の疾病の実態について	屋比久　進
		豚の線維素性胸膜肺炎,心のうゆ着を主徴とする疾病の調査	安里　学
		と畜の黄疸に関する調査(第一報)	渡口　政司
		トキソプラズマ,ビバリー株感染マウスの血清中抗体の経時的変化とシストの検出状況ついて	上地　俊秀
	獣医公衆衛生学会(九州)	と畜の黄疸に関する調査(第1報)	渡口　政司
昭和54年	業務報告会(6回)	と畜の黄疸及び尿毒症に関する調査	島谷　融
		*Yersinia enterocolitica*の調査	上地　俊秀
		と畜場におけるToxoplasma病に関する調査(その2)	渡口　政司
		豚の糖尿病を疑う糸球体硬化症	島袋　泰俊(北部支所)
	その他	食肉検査について	大城　孝喜
	県公衆衛生学会(11回)	と畜の前眼房水中の尿素測定値について	島谷　融
		と畜場における人畜共通感染症の傾向について	渡口　政司
		店舗マナイタからの *Yersinia enterocolitica*の分離成績	上地　俊秀
		豚膿瘍から分離したグラム陰性桿菌の生物学的性状について	渡口　左知子
		と畜における抗菌性物質の残留調査	浦崎　民雄
昭和54年	県獣医学会(10回)	と畜場におけるToxoplasma病に関する調査(その二)	渡口　政司
		豚の糖尿病を疑う糸球体硬化症	島袋　泰俊(北部支所)
		と畜の黄疸および尿毒症に関する調査	島谷　融
		*Yersinia enterocolitica*の調査	上地　俊秀
	獣医公衆衛生学会(九州)	と畜の黄疸に関する調査(第2報)	島谷　融
		と畜場におけるToxoplasma病に関する調査	渡口　政司
昭和55年	業務報告会(7回)	と畜場における抗菌性物質の残留調査(その三)	野村　一則
		豚Hemophilus様肺炎より分離された*Hemophilus* について	島谷　融
		と殺豚の格付けと病変の関係について	渡口　政司
		虫卵検査と疾病等についての一考察	野村　一則
		死虫免疫マウスの感染防御におよぼすLevamisoleの効果	渡口　政司
	全食協病理部会(3回)	豚の腫瘍	島袋　泰俊(北部支所)
	県公衆衛生学会(12回)	と畜場で廃棄される豚の肺臓病変の病理組織学的所見	比嘉　次郎
		と殺豚から分離した抗酸菌に関する研究(分離菌の生物学的並びに生化学的性状)	本田　善美
	県衛生監視員研究発表会(11回)	トキソプラズマ死虫免疫マウスの感染防御におよぼすレバミゾールの免疫増強効果	渡口　政司
		と殺豚肺病変からの Hemophilus 菌分離について	島谷　融
	県獣医学会(11回)	と畜場における抗菌性物質の残留調査(その三)	野村　一則
		豚 Hemophilus 様肺炎より分離された *Hemophilus* について	島谷　融
		と殺豚の格付けと病変の関係について	渡口　政司
		虫卵検査と疾病等についての一考察	野村　一則
		トキソプラズマ死虫免疫マウスの感染防御におよぼすLevamisoleの効果	渡口　政司
	獣医公衆衛生学会(九州)	と殺豚肺病変からの Hemophilus 菌分離について	島谷　融
昭和56年	全食協病理部会(4回)	豚の腸	島袋　泰俊(北部支所)
		豚の肝にみられた腫瘤	野中　克治
	全食協病理部会(5回)	豚の耳殻部の腫瘤	徳嶺　光男
	県公衆衛生学会(13回)	抗酸菌の各種消毒剤に対する抵抗性について	本田　善美
	県衛生監視員研究発表会(12回)	豚の肝実質からの*Salmonella* について	新里　武則
		食用に不適な豚の肺病変の病理組織学的所見について	徳嶺　光男
	県獣医学会(12回)	豚の悪性腫瘍	島袋　泰俊(北部支所)
		豚の肝実質からの*Salmonella* について(第二報)	新里　武則
		と殺豚から分離した抗酸菌について(第二報)	本田　善美
		トキソプラズマ死虫免疫マウスの感染防御におよぼすレバミゾールの免疫増強効果(Ⅱ)	渡口　政司
	獣医公衆衛生学会(九州)	と殺豚から分離した抗酸菌について	本田　善美
		豚の悪性腫瘍	島袋　泰俊(北部支所)
昭和57年	業務報告会(8回)	豚の白血病について	徳嶺　光男
		牛の白血病抗体調査	安斎　俊一
		カンピロバクターについて	新里　武則
		と殺豚から分離した非定型マイコバクテリアの各種消毒剤に対する感受性について	本田　善美
		と畜場でみられた豚の腸炎型炭疽について	渡口　政司
		回腸の肥厚を特徴とする小腸炎について	島袋　泰俊(北部支所)
		心臓病変の病理学的所見について	長田　悦朗(北部支所)
		血液塗抹標本作成に関する2,3の条件の検討　　1.主として牛の白血球について	安里　左知子
	全食協病理部会(6回)	豚の耳介部の変形(異常)	比嘉　次郎
		牛の心内膜に発生した腫瘤	長田　悦朗(北部支所)

年 度	学会、研修会名	発　　表　　演　　題　　名	発表者名
昭和57年	全食協病理部会(6回)	豚の回腸2例	島袋　泰俊(北部支所)
	全食協病理部会(7回)	豚の肝臓にできた腫瘤	長田　悦朗(北部支所)
		豚の結腸及び盲腸	徳嶺　光男
	県公衆衛生学会(14回)	ウシ白血病の公衆衛生学的諸問題　～ウシ白血病ウイルスのヒトへの感染の可能性について	安斉　俊一
		豚の回腸の肥厚を特徴とする小腸炎	島袋　泰俊(北部支所)
	県衛生監視員研究発表会(13回)	と殺豚から分離した*Campylobacter fetus* subsp *jejuni* について	新里　武則
		と畜場でみられた豚の腸炎型炭疽について	渡口　政司
	県獣医学会(13回)	沖縄県における牛の白血病抗体調査	安斉　俊一
		と畜場でみられた豚の白血病一例について	徳嶺　光男
		血清生化学的検査に関する基礎試験	渡口　左知子
		と畜場でみられた豚の腸炎型炭疽について	渡口　政司
		豚の回腸の肥厚を特徴とする小腸炎	島袋　泰俊(北部支所)
		沖縄本島内におけると殺豚および環境物質からの非定型マイクロバクテリアの分離状況	本田　善美
	獣医公衆衛生学会(九州)	と畜場でみられた豚の腸炎型炭疽について	渡口　政司
昭和58年	業務報告会(9回)	豚の腸炎型炭疽について	大城　章信(北部支所)
		一部廃棄の対象となる疾病の病理組織検査及び病名統一	長田　悦朗(北部支所)・徳嶺　光男
		沖縄県におけるブタ白血病の発生状況	安斉　俊一
		膵蛭および小型膵蛭の調査について	比嘉　健俊
		肉豚の雌雄別一部廃棄率と格付けについて	名幸　方光(北部支所)
		枝肉中の抗菌性物質の残留調査について	城間　秀栄
		Salmonella typhi-suisを原因菌とする豚のサルモネラ症について	新里　武則
		沖縄本島内におけると殺豚および環境物質からの非定型マイクロバクテリアの分離状況	本田　善美
	全食協病理部会(8回)	豚の腫瘍	徳嶺　光男
		豚の腹腔内腫瘍	長田　悦朗(北部支所)
		豚の腎(動脈の病変2例)	島袋　泰俊(北部支所)
	県公衆衛生学会(15回)	沖縄県で発生した成牛型(地方病型)ウシ白血病およびその安全性について	安斉　俊一
	県衛生監視員研究発表会(14回)	*Salmonella* typhi-suisを原因菌とする豚のサルモネラ症について	新里　武則
	県獣医学会(14回)	沖縄本島内におけると殺豚および環境物質からの非定型マイクロバクテリアの分離状況	本田　善美
		Salmonella typhi-suisを原因菌とする豚のサルモネラ症について	新里　武則
		沖縄県のと畜場におけるブタ白血病の発生状況について	安斉　俊一
		血清保存が乳用牛血清成分におよぼす影響について	安里　左知子
昭和59年	業務報告会(10回)	沖縄県のと畜場ではじめて見られた牛の白血病について	安斉　俊一
		北部支所における日常業務及び食肉の抗菌性物質の残留調査(昭和58年度)	喜久嶺　政男
		と畜場で見られた牛の腺ガンについて	徳嶺　光男
		ブタのサルモネラ症について	新里　武則
		ブタの悪性顆粒膜細胞腫について	長田　悦朗
		市販されている「抗酸菌鑑別セット」を用いての非定型抗酸菌の検査成績について	本田　善美
	全食協病理部会(11回)	牛の肝臓に形成された腫瘤	船木　明美
	県公衆衛生学会(16回)	*Salmonella* typhi-suisのHeLa細胞への侵入能について	安斉　俊一
	県衛生監視員研究発表会(15回)	枝肉における抗菌性物質の残留調査について	新里　武則
	県獣医学会(15回)	と畜場で見られた牛の小腸癌について	徳嶺　光男
		沖縄県のと畜場でみられた成牛型(地方病型)ウシ白血病について	安斉　俊一
	獣医公衆衛生学会(九州)	と畜場で見られた牛の小腸癌について	徳嶺　光男
昭和60年	業務報告会(11回)	*Yersinia enterocolitica*の調査(その二)	新里　武則
		と畜場搬入ヤギから分離した非定型マイコバクテリアについて	本田　善美
		牛の白血病(胸腺型)について	棚原　憲実
		と殺時に見られた増殖性出血性腸炎について	長田　悦朗
		と畜場内従事者の衛生意識調査	大野　惇
		切迫緊急獣畜の対応(その一事例)について	喜納　政則(北部支所)
	全食協病理部会(12回)	牛の心臓	長田　悦朗
		豚の腎病変3例	徳嶺　光男
	全食協病理部会(13回)	牛の胸部腫瘤	棚原　憲実
		豚の小腸	長田　悦郎
	県公衆衛生学会(17回)	沖縄県のと畜場で摘発された動物疾病とヒトへの影響について	安斉　俊一
	県衛生監視員研究発表会(16回)	*Salmonella* typhi-suis の病原性因子に関する研究	安斉　俊一
	県獣医学会(16回)	犬下痢症ウイルスの分離	安斉　俊一
		牛の肝細胞癌について	船木　明美
		と畜場に搬入されたヤギから分離されたいわゆる非定型抗酸菌について	本田　善美
	獣医公衆衛生学会(九州)	牛の肝細胞癌について	船木　明美
昭和61年	業務報告会(12回)	血液塗抹方法及び全血放置が血球形態に及ぼす影響について	大濵　勝
		自動血球計算機による豚の血球算定条件の決定と計算盤法との比較	大野　惇
		豚の血液の白血球百分率比と細菌検査について	島袋　泰俊(北部支所)

年 度	学会、研修会名	発　　表　　演　　題　　名	発表者名
昭和61年	業務報告会(12回)	疣状心内膜炎型豚丹毒について	大城　猛(北部支所)
		山羊のトキソプラズマ抗体調査	與那原　良克
		黄疸生化学検査方法の検討	川﨑　克
		牛の特発性うっ血型心筋症について	沢岻　安晃
		豚の悪性黒色腫について	城間　秀栄
	全食協病理部会(14回)	豚の骨髄性白血病(緑色腫)について	棚原　憲実
	全食協病理部会(15回)	豚の肝臓	棚原　憲実
	県衛生監視員研究発表会(17回)	と畜場搬入ヤギから分離された非定型マイコバクテリアについて	本田　善美
	県獣医学会(17回)	豚の骨髄性白血病(緑色腫)について	棚原　憲実
	獣医公衆衛生学会(九州)	豚にみられた骨髄性白血病(緑色腫)の1例	棚原　憲実
昭和62年	業務報告会(13回)	尿毒症の検査法および正常値について	川﨑　克
		豚の血清乳酸脱水素酵素について	大野　惇
		山羊の「膵蛭」寄生における白血球比について	新里武則(八重山保健所)
		異常豚の残留抗菌性物質の調査について	小杉　龍生
		と畜場でみられた敗血症の1症例について	金城　清二
		豚の肺膿瘍を中心とする膿瘍からの菌分離について	盛　直美
		関節炎型豚丹毒の調査について	近藤　徹久
		南部の1と畜場における細菌汚染の実態調査について	大濵　勝
		北部のと畜場における枝肉の細菌汚染調査について	大城　猛(北部支所)
		豚にみられた精巣の多発性異所性発育	中村　正治
		業務のための小さな工夫	城間　秀栄
	全食協病理部会(16回)	山羊の肝臓	棚原　憲実
	全食協病理部会(17回)	肝の腫瘤	中村　正治
	県公衆衛生学会(19回)	スクリーニング法による山羊のトキソプラズマ抗体調査	安里　学
	県獣医学会(18回)	豚の血球形態に及ぼす血液塗抹標本作成方法及び血液保存条件の影響について	大濵　勝
		自動血球計算機による血球算定条件の検討	大野　惇
		豚の巨大肝脾症候群の1症例	島袋　泰俊(北部支所)
	日本臨床獣医学会(九州)	豚の血球形態に及ぼす血液塗抹標本作成方法及び血液保存条件の影響について	大濵　勝
昭和63年	業務報告会(14回)	豚の盲腸内容からの*Yersinia*の分離について	新里　康彦
		臓器症状から見た敗血症の可能性について(主として腹膜炎から)	豊見城　功栄
		豚の骨髄性白血病の1症例	島袋　泰俊(北部支所)
		外牛及び県内牛の内部寄生虫の感染状況について	盛　直美
		外牛検査留意点と、疾病の傾向について	大濵　勝
		昭和62年度沖縄県食肉センターにおける病牛及び緊急牛の実態調査について	嘉数　浩
		和牛の疣状心内膜炎の1症例について	大野　惇
	全食協病理部会(18回)	牛の肝臓にみられた腫瘤(二例)	外川　和彦
	県衛生監視員研究発表会(19回)	沖縄県の一と畜場における細菌汚染の実態調査について	大濵　勝
	県獣医学会(19回)	過去4年間のと畜検査における豚の疾病の推移について	本田　善美
		豚の肺腫瘍を中心とする腫瘍からの菌分離について	盛　直美
	全食協病理部会(20回)	豚の肝臓の腫瘤	嘉数　浩
	県衛生監視員研究発表会(20回)	オーストラリアからの輸入牛にみられた単包虫症について	中村　正治
	県獣医学会(20回)	オーストラリアからの輸入牛にみられた単包虫症について	嘉数　浩
平成　元年	獣医公衆衛生学会(九州)	オーストラリアからの輸入牛にみられた単包虫症について	嘉数　浩
平成　2年	技術研修会(15回)	蕁麻疹型豚丹毒の調査(中間報告)	中村　正治
		獣畜におけるリステリア保菌実態調査について	小杉　龍生
		豚のレプトスピラ症について	富永　正哉
		病畜および保留畜における残留抗菌性物質の検査	国吉　尚子
		豚赤痢における大腸炎と肝炎の相関関係等について	平川　宗隆
		M食肉センターにおけるパソコンを利用しての統計処理について	中島　秀人
		PSE(ふけ肉)の調査について	新里　武則
		豚の筋脂肪症	小野寺　至
		牛の白血病について	徳嶺　光男
	全食協病理部会(22回)	豚の肺の腫瘤	富永　正哉
	全食協病理部会(23回)	牛の肺と腹腔内腫瘤	長田　悦朗
	九食協研修会(19回)	牛の白血病について	徳嶺　光男
	県公衆衛生学会(21回)	豚の盲腸内容からの*Yersinia*の分離について	本田　善美
	県衛生監視員研究発表会(21回)	過去5年間の当検査所における豚の全身性疾患について	大野　惇
	県獣医学会(21回)	豚にみられた住肉胞子虫について	田端　亜樹
	獣医公衆衛生学会(九州)	豚にみられた住肉胞子虫症状	田端　亜樹
平成　3年	技術研修会(16回)	病畜および保留獣畜の残留抗菌性物質について	大濵　尚子
		一般搬入豚の残留抗菌性物質について	近藤　徹久
		いわゆる病畜牛(診断書付き)における残留抗菌性物質について	平安　常寛
		病畜牛の現況と方向性について	中島　秀人
		と畜場におけるリステリア菌属の汚染状況について	小杉　龍生

年 度	学会、研修会名	発　　表　　演　　題　　名	発表者名
平成 3年	所内研修会(16回)	豚の*Sarcocystis* spp.(住肉胞子虫)の感染状況について	大野　明美
		Sarcocystis spp.(住肉胞子虫)によると思われる全身性筋炎について	大野　明美
		と畜検査に於いて遭遇するいわゆる肝炎について	富永　正哉
		線維増殖性肝(FL)の病理組織所見について	中村　正治
		豚赤痢における大腸と肝臓の病理組織学的検討	徳嶺　光男
	全食協病理部会(24回)	馬の肝臓	富永　正哉
	全食協病理部会(25回)	牛の肩部の腫瘤	富永　正哉
	九食協研修会(20回)	山羊における住肉胞子虫の寄生状況について	田端　亜樹
	県衛生監視員研究発表会(22回)	食肉衛生検査所における残留抗菌性物質の検出状況について	大野　惇
	県獣医学会(22回)	豚の悪性黒色腫	富永　正哉
	獣医公衆衛生学会(九州)	豚の悪性黒色腫	富永　正哉
平成 4年	技術研修会(17回)	マレック病の病理組織学的所見	小杉　龍生(北部支所)
		産卵鶏に見られた腹腔内腫瘤について	名嘉真　美奈子
		山羊の適正処理指導の実施状況について	島袋　端(北部支所)
		山羊消化器寄生虫の虫卵検査	安里　学
		拭き取り検査による食鳥処理場の衛生状態について	新里　武則
		残留抗菌性物質のモニタリング検査報告	大濵　尚子
		異常豚(病畜)における残留抗菌性物質の検出状況について	大野　惇
		病牛における残留抗菌性物質調査について	城間　ひろみ
	全食協病理部会(27回)	豚の肝臓	富永　正哉
	全食協微生物部会(12回)	拭き取り検査による食鳥処理場の衛生状態について(特にカット室の衛生について)	新里　武則
	全食協理化学部会(10回)	畜水産食品中の残留抗菌性物質モニタリング調査	城間　ひろみ
	九食協研修会(21回)	産卵鶏に見られた腹腔内腫瘤について	名嘉真　美奈子
		拭き取り検査による食鳥処理場の衛生状態について	新里　武則
	県公衆衛生学会(24回)	食肉衛生検査所における残留抗菌性物質の調査について	大濵　尚子
	県衛生監視員研究発表会(23回)	食肉衛生検査所における残留抗菌性物質の調査について	大濵　尚子
	県獣医学会(23回)	豚住肉胞子虫の感染状況と形態学観察	大野　明美
		県内と畜場カット室の衛生状況について	中島　秀人
		畜水産食品中の残留抗菌性物質モニタリング調査	大野　惇
	獣医公衆衛生学会(九州)	豚住肉胞子虫の感染状況と形態学観察	大野　明美
	獣医公衆衛生学会(全国)	豚住肉胞子虫の感染状況と形態学観察	大野　明美
平成 5年	技術研修会(18回)	北部支所管内における山羊の密殺防止対策について	大濱　勝(北部支所)
		各と畜場で使用する抗菌性物質簡易検査用培地の簡素化について	赤嶺　綾子
		薄層クロマトグラフィー・バイオオートグラフィーによるアンピシリンの同定について	名嘉真　美奈子
		食鳥処理場において廃棄される「削痩および発育不良」鶏の疾病分類調査について	稲嶺　修(北部支所)
		鶏の大腸菌症の病理組織学的検査について	島袋　端(北部支所)
		ブロイラーにおける緑色を呈する肝臓の病理組織学的、理化学的検査	小杉　龍生(北部支所)
		山羊膿毒症の一例	玉城　正幸
		廃用豚(繁殖用雌豚)の腎臓病変について	金城　清二
		産卵鶏に見られる線癌について	徳嶺　光男
		認定小規模食鳥処理場の監視指導状況について	新垣　政一(北部支所)
		豚枝肉における汚染状況について(作業工程を追って)	平安　常寛
		食鳥処理場における衛生状態について	新垣　千賀子
		と畜場に搬入された山羊のレプトスピラ抗体保有状況	与那原　良克
		肉眼所見により症状の程度別に分類した大腸菌症鶏の細菌検査について	城間　秀栄(北部支所)
		と畜場に搬入された牛の盲腸内容物からの病原性大腸菌の分離について(特に、O157を中心にして)	本田　善美
	全食協病理部会(28回)	鶏の腺癌	徳嶺　光男
	全食協病理部会(29回)	豚の肝臓に見られた腫瘤	城間　ひろみ
	全食協微生物部会(13回)	と畜場に搬入された山羊のレプトスピラ抗体保有状況について(予報)	與那原　良克
	県衛生監視員研究発表会(24回)	某食鳥処理場の衛生について	本田　善美
		食鳥検査で見られた疾病及び衛生検査について	島袋　端(北部支所)
	県獣医学会(24回)	と畜場に搬入された牛の盲腸内容物からの病原性大腸菌の分離について(特に、O157を中心にして)	本田　善美
		沖縄県における豚の住肉胞子虫の感染状況と形態(第2報)	大野　明美
		豚横紋筋に認められた結節病変に関する調査	大野　明美
		異常豚(病畜)における残留抗生物質の検出状況について	嘉数　浩
		某食鳥処理場における衛生状態について(拭取り検査の結果から)	平安　常寛
		食鳥処理場において廃棄される「削痩および発育不良」鶏の病類および菌検索	稲嶺　修(北部支所)
	獣医公衆衛生学会(九州)	沖縄県における豚の住肉胞子虫の感染状況と形態(第2報)	大野　明美
		と畜場に搬入された牛の盲腸内容物からの病原性大腸菌の分離について(特に、O157を中心にして)	本田　善美
	九食協研修会(22回)	と畜場に搬入された山羊のレプトスピラ抗体保有状況について	與那原　良克
		抗菌性物質簡易検査用培地の簡素化について	赤嶺　綾子
	食肉衛生技術研修会(全国)	と畜場に搬入された山羊のレプトスピラ抗体保有状況について	與那原　良克

年 度	学会、研修会名	発　　表　　演　　題　　名	発表者名
平成 6年	技術研修会(19回)	食鳥処理場における鶏肉の衛生状態について	稲嶺　修(北部)
		と畜場の豚枝肉及び食鳥処理場における細菌学的汚染状況について	大城　哲也
		非定型抗酸菌症の集団発生を呈した1牧場のオガクズからの菌分離について	本田　善美
		牛枝肉のVero毒素産生性大腸菌の実態調査について	玉城　正幸
		肝蛭寄生を伴う山羊の肝内胆管の過形成	大野　明美
		豚の転移性骨肉腫について	城間　ひろみ
		繁殖豚の腹腔内腫瘤について	島袋　端(北部)
		2年前に残留抗菌性物質が陽性とされたハチミツのその後	嘉数　浩
		山羊の糞線虫について	名嘉真　美奈子
		炭疽の細菌学的検査について	長田　悦朗
		炭疽発生時の行政対応について	安富祖　豊廣
		日常業務でのコンピューター入力ミス事例について	安里　学
	全食協病理部会(30回)	鶏の皮膚と肝臓の腫瘤	島袋　端(北部)
	県獣医学会(25回)	各現場で使用する抗菌性物質簡易検査用培地の簡素化について	赤嶺　綾子
		鶏の皮膚型マレック病について	島袋　端(北部)
		と畜場に搬入された山羊のレプトスピラ抗体保有状況	與那原　良克
	県衛生監視員研究発表会(25回)	豚枝肉における細菌汚染状況について(作業工程を追って)	玉城　正幸
	全食協病理部会(31回)	豚の肺臓・胸腔内に見られた腫瘤	城間　ひろみ
	九食協研修会(23回)	肝蛭寄生を伴う山羊の肝内胆管の過形成	大野　明美
平成 7年	技術研修会(20回)	と畜場における枝肉の細菌汚染の実態調査について	森河　隆史
		管内食鳥処理場における食鳥肉の衛生状況について	稲嶺　修(北部)
		牛の胆汁から分離されたカンピロバクターについて	大城　哲也
		マクファーランド比濁計標準液を用いた菌液の調整	平良　勝也
		と畜場に搬入された豚からのSDDの検出について(報告)	赤嶺　綾子
	所内研修会(20回)	C食鳥処理場における死鳥(ブロイラー)の発生原因調査	新里　康彦(北部)
		ブロイラーにみられる腸管出血病変について	徳嶺　光男
		ウマの悪性黒色腫	新垣　衡
		豚の外部寄生虫について	嘉数　浩
		アフリカザンビアの視察報告	平川　宗隆(北部)
	九食協研修会(24回)	豚の転移性骨肉腫について	玉城　正幸
	全食協病理部会(32回)	山羊の肝臓にみられた腫瘤	平良　勝也
	県獣医学会(26回)	豚の転移性骨肉腫について	玉城　正幸
	県衛生監視員研究発表会(26回)	山羊の糞線虫について	名嘉真　美奈子
平成 8年	技術研修会(21回)	豚の悪性腎芽腫	森河　隆史
		鶏の浅胸筋に発生した腫瘤	大野　明美(北部)
		畜産食品中の残留抗菌性物質モニタリング検査結果	平良　勝也
		O-157を中心としたと畜場の衛生管理	古堅　愛美
		イボ状心内膜炎の調査	長嶺　ゆり
		トリガラの細菌調査	大濵　尚子(北部)
	全食協病理部会(35回)	豚の肝臓の腫瘤	森河　隆史
	県獣医学会(27回)	豚肉中におけるSDDの残留事例	平良　勝也
		馬の悪性黒色腫	新垣　衡
	九食協研修会(25回)	豚の悪性腎芽腫	森河　隆史
	県衛生監視員研究発表会(27回)	牛の胆汁から分離されたカンピロバクターについて	大城　哲也
平成 9年	技術研修会(22回)	豚赤痢における肝臓の病理学的検討	嘉数　浩
		と畜場におけるハエの細菌保有調査	徳嶺　光男
		繁殖豚と肥育豚の疾病の比較	富永　正哉
		豚赤痢における肝臓の廃棄状況	森河　隆史
		畜産食品中の残留有害物質モニタリング検査結果	新垣　衡
		業務管理基準(GLP)の取り組み状況	大濵　尚子(北部)
		と畜検査の標準作業書モデル	大野　明美(北部)
		と畜場における牛枝肉の細菌学的汚染源調査	上原　美智代
		と畜場における牛枝肉の腸管出血性大腸菌O-157の検査状況	安座間　明日香
		ヨーネ病(牛)について(事例報告)	小杉　龍生
	県獣医学会(28回)	豚の悪性腎芽腫	嘉数　浩
	県衛生監視員研究発表会(28回)	畜水産食品の残留有害物質モニタリング検査結果	新垣　衡
		HACCPシステムによる牛のとさつ解体処理	新里　康彦(北部)
		管内食肉処理施設における衛生状況	中込　健次(北部)
	九食協研修会(26回)	HACCPシステムによる牛のとさつ解体処理	中込　健次(北部)
		O食肉センターにおける牛枝肉の拭き取り検査	赤嶺　綾子
平成10年	技術研修会(23回)	採卵鶏の卵管膜靭帯にみられた平滑筋腫	安座間　明日香
		A食鳥処理場における中抜解体ラインの微生物汚染調査	宮平　誠人
		関節炎型豚丹毒のPCR法の応用について	多田　雪宏
		山羊、豚の抗酸菌症を疑う症例	向井　茂樹

年 度	学会、研修会名	発　表　演　題　名	発表者名
平成10年	技術研修会(23回)	食肉衛生検査データ分析報告(その1) トキソプラズマ病	富永　正哉
		豚赤痢様腸炎の農場別発生状況及びその現状と課題	立沢　ちさ(北部)
		豚赤痢を疑う豚からの菌分離について	上原　美智代
		豚赤痢を疑う豚の薬剤残留検査	大浜　尚子
		県内Aと畜場における牛枝肉の細菌汚染状況	小田　英治
		県内Aと畜場における微生物制御－牛枝肉拭き取り調査－	田端　亜樹
		豚のと殺・解体作業工程における拭き取り調査	長嶺　ゆり(北部)
		県内Aと畜場における微生物制御－牛枝肉拭き取り調査－	三輪　英一
		と畜場及び食鳥処理場の衛生管理	富永　正哉
	全食協病理部会(38回)	糖原変性を疑う豚の肝臓	森河　隆史
	県獣医学会(29回)	県内Aと畜場における微生物制御－牛枝肉拭き取り調査－	上原　美智代
		「と畜場施行規則」一部改正に伴うHACCPシステムの考え方に沿った文書の作成	中込　健次(北部)
	県衛生監視員研究発表会(29回)	県内Aと畜場における微生物制御－牛枝肉拭き取り調査－	上原　美智代
		と畜衛生業務連絡会議とその効果	長嶺　ゆり(北部)
	九食協研修会(27回)	「と畜場施行規則」一部改正に伴うHACCPシステムの考え方に沿った文書の作成	中込　健次(北部)
	全食協病理部会(39回)	卵管膜靱帯に認められた平滑筋腫	安座間　明日香
	食肉衛生技術研修会(全国)	米国の食肉衛生管理事情	岸本　敦
平成11年	技術研修会(24回)	管内における豚丹毒の廃棄状況	大塲　三緒子
		関節炎型豚丹毒の判定におけるPCR法と培養法の比較	渡邉　章子
		豚赤痢様腸炎の細菌同定	安里　優子
		理化学室におけるGLP実施状況	上原　美智代
		と畜場における山羊枝肉の細菌汚染調査	坂田　尚美(北部)
		A食鳥処理場における拭き取り検査結果に基づく衛生指導	森河　隆史
		管内における豚肝臓廃棄の推移	三輪　英一
		牛の肝臓にみられる病変	小西　清美
	全食協病理部会(40回)	山羊の肝臓の腫瘤	向井　茂樹
	県獣医学会(30回)	関節炎型豚丹毒の判定におけるPCR法の応用について	多田　雪宏
		豚赤痢様腸炎における肝臓－細菌学的検討－	中込　秀子
		山羊のリンパ肉腫	宮平　誠人
		採卵鶏の卵管膜靱帯にみられた平滑筋腫	安座間　明日香
		豚のと殺・解体作業工程における拭き取り調査	長嶺　ゆり(北部)
	獣医公衆衛生学会(九州)	山羊のリンパ肉腫	宮平　誠人
		採卵鶏の卵管膜靱帯にみられた平滑筋腫	安座間　明日香
		関節炎型豚丹毒の判定におけるPCR法の応用について	多田　雪宏
		豚赤痢様腸炎における肝臓－細菌学的検討－	福原　優子
		豚のと殺・解体作業工程における拭き取り調査	長嶺　ゆり(北部)
	九食協研修会(28回)	豚赤痢様腸炎における肝臓－細菌学的検討－	中込　秀子
	全食協病理部会(41回)	山羊の胸腔及び腹腔内の腫瘤	宮平　誠人
平成12年	技術研修会(25回)	A認定小規模食鳥処理場における衛生状況について(第一報)～拭き取り調査に基づく衛生指導～	古堅　愛美
		認定小規模食鳥処理場の衛生について	長嶺　ゆり(北部)
		Sと畜場における牛枝肉汚染状況の推移	芳垣　純子
		Sと畜場における養豚農家のフィードバックについて	宮城　国太郎
		Tと畜における衛生指導とその効果	奥村　晴奈
		と畜場における山羊枝肉の細菌汚染調査	新垣　尚美(北部)
		中央食肉衛生検査所管内における豚丹毒の廃棄状況(第二報)	三輪　英一
		牛の品種別疾病発生状況について	三木田　宗紀
		病畜の残留抗生物質検査状況について	中込　秀子
		と畜場搬入獣畜におけるクリプトスポリジウム感染調査(第一報)	六川　潤美
		免疫染色の導入と免疫組織化学の病理診断への応用	渡邉　章子
		鶏2例にみられた奇形腫について	藤井　葉子
	県獣医学会(31回)	A食鳥処理場における拭き取り検査結果に基づく衛生指導	宮平　誠人
		と畜場における山羊枝肉の細菌汚染調査	新垣　尚美(北部)
	県衛生監視員研究発表会(31回)	O食鳥処理場における細菌汚染状況調査(第一報)	三木田　宗紀
	獣医公衆衛生学会(全国)	山羊のリンパ腫	宮平　誠人
	九食協研修会(29回)	A食鳥処理場における拭き取り検査結果に基づく衛生指導	宮平　誠人
		沖縄県Nと畜場における山羊枝肉の細菌汚染調査	新垣　尚美(北部)
	全食協病理部会(43回)	鶏の腹腔腫瘤	渡邉　章子
	食鳥肉衛生技術研修会(全国)	A食鳥処理場における拭き取り検査結果に基づく衛生指導	宮平　誠人
平成13年	技術研修会(26回)	Tと畜場における豚レバーの衛生状況	向井　茂樹
		Tと畜場カット室における衛生指導とその効果(第一報)	奥村　晴奈
		食鳥の直腸スワブから分離したサルモネラの血清型および薬剤耐性	須佐　たまき
		山羊の肝・肺・腎にみられた腫瘍	宇都宮　公子
		API(自動細菌同定装置)による敗血症の原因菌同定	櫻井　秀樹

年 度	学会、研修会名	発　　表　　演　　題　　名	発表者名
平成13年	技術研修会(26回)	と畜場搬入獣畜および排水におけるクリプトスポリジウム汚染状況調査	六川　潤美
		生菌発育凝集反応を用いた関節炎型豚丹毒検査法の検討	小田　英治
		管内のと畜場で分離された豚丹毒菌の薬剤感受性	宮城　国太郎
		フルベンダゾール試験の回収率向上に関する一考察	渡邉　章子
		豚トキソプラズマ病の発生状況	安里　優子
	県獣医学会(32回)	悪性リンパ腫の免疫組織学的検討	安里　優子
		鶏の奇形腫	藤井　葉子
		管内における豚丹毒の発生状況	宮城　国太郎
	九食協研修会(30回)	管内における豚丹毒の発生状況	宮城　国太郎
	県衛生監視員研究発表会(32回)	畜水産食品残留有害物質モニタリング検査結果	中込　秀子
平成14年	技術研修会(27回)	Tと畜場における山羊の衛生指導について	小田　英治
		管内における牛の肝臓疾患の発生状況	吉田　崇
		スピラマイシン検査法についての考察	比嘉　美咲
		食鳥処理場におけるVRE調査とその対策	宮城　国太郎
		豚、山羊、採卵鶏、ブロイラーのサルモネラ保菌状況および薬剤耐性について	岩井　愛子
		と畜場に搬入された繁殖豚のレプトスピラ抗体保有状況	芳垣　純子
		抗酸菌症迅速診断システム導入の検討	日比谷　健司
		採卵鶏の腺癌について	宇都宮　公子
		巣状壊死と点状出血の見られる豚の肝臓	藤井　葉子
	県獣医学会(33回)	管内における豚トキソプラズマ病の発生状況	安里　優子
		特異な組織所見を示した山羊の肝細胞癌	宇都宮　公子
		食鶏のサルモネラの保菌率および薬剤耐性	須佐　たまき
		管内のと畜場で分離された豚丹毒菌の薬剤耐性	宮城　国太郎
	県衛生監視員研究発表会(33回)	と畜場搬入獣畜および排水におけるクリプトスポリジウム汚染状況調査	六川　潤美
	獣医公衆衛生学会(九州)	特異な組織所見を示した山羊の肝細胞癌	宇都宮　公子
	九食協研修会(31回)	食鶏のサルモネラ保菌率および薬剤耐性	須佐　たまき
		特異な組織所見を示した山羊の肝細胞癌	宇都宮　公子
	食肉衛生技術研修会(全国)	管内における豚トキソプラズマ病の発生状況	安里　優子
		特異な組織所見を示した山羊の肝細胞癌	宇都宮　公子
平成15年	技術研修会(28回)	食鳥処理場の自主衛生管理チーム立ち上げへの関わり	安座間　明日香
		カンノンアヒルのサルモネラ及びカンピロバクター保菌調査	小原　海和(北部)
		管内N食肉センターにおける豚枝肉の衛生状況	後藤　英子(北部)
		山羊枝肉の微生物制御を目的とした火炎処理工程の検討	仲間　基樹(北部)
		豚の腎臓における腫瘍	吉田　崇
		豚の肝硬変	加藤　峰史(北部)
		N食肉センターにおける豚のミルクスポット発生状況	安里　優子(北部)
		豚の抗酸菌症の発生状況及び病変の検討	仁平　稔
		豚の抗酸菌症における検査方法の検討	佐藤　まどか
		液体培地とPCRを併用した抗酸菌検査システムの確立	宮城　国太郎
		非結核型抗酸菌症の研究−豚の感染源と感染経路−	日比谷　健司
		ジクラズリル及びナイカルバジン試験法について	喜屋武　向子
		牛における筋肉水腫の廃棄基準に関する基礎研究	後藤　剛
		施設改善に伴う枝肉の微生物汚染状況の推移	平良　雅克
		食肉衛生検査30年間のあゆみ	嘉数　浩
	県衛生監視員研究発表会(34回)	食鳥処理場におけるVRE調査とその対策	宮城　国太郎
	県獣医学会(34回)	食鳥処理場におけるVRE調査とその対策	宮城　国太郎
		豚、山羊、採卵鶏、ブロイラーのサルモネラ保菌状況および薬剤耐性	岩井　愛子
	獣医公衆衛生学会(九州)	食鳥処理場におけるVRE調査とその対策	宮城　国太郎
	九食協研修会(32回)	豚、山羊、採卵鶏、ブロイラーのサルモネラ保菌状況および薬剤耐性	岩井　愛子
		抗酸菌症診断における迅速性と精度の検討	日比谷　健司
	食鳥肉衛生技術研修会(全国)	採卵鶏、ブロイラーのサルモネラ保菌状況および薬剤耐性	岩井　愛子
	食肉衛生技術研修会(全国)	抗酸菌症診断における迅速性と精度の検討	日比谷　健司
平成16年	技術研修会(29回)	豚結腸スピロヘータ症の浸潤状況	宮本　雄二郎
		と畜場に搬入されたブタ・ヤギにおけるHEV保有調査	平良　雅克
		トキソプラズマ検査法の検討	喜屋武　向子
		豚の肝臓における腫瘤	髙木　祐司
		豚赤痢治療薬残留検査法の検討	近藤　海和
		管内N食肉センターにおける豚枝肉の衛生状況(第2報)	後藤　英子(北部)
		と畜検査結果のフィードバックについての取り組み	長嶺　ゆり
		ブロイラーにみられた皮膚炎	稲嶺　美奈子
		食鳥処理場のカット室における衛生状況について(第1報)	照屋　理香(北部)
		認定小規模食鳥処理場の衛生指導	小田　葉子(北部)
		食鳥検査結果集計システムの紹介	安里　優子(北部)
		管内C食肉センターでとちくされた山羊の調査	平川　宗隆

年 度	学会、研修会名	発　　表　　演　　題　　名	発表者名
平成16年	県獣医学会(35回)	液体培地とPCRを併用した抗酸菌検査システムの確立	宮城　国太郎
		豚の抗酸菌症の発生状況及び病変の検討	佐藤　まどか
		N食肉センターにおける豚のミルクスポット発生状況	安里　優子(北部)
	県衛生監視員研修会(35回)	施設改善に伴う枝肉の微生物汚染状況の推移	平良　雅克
		山羊枝肉の微生物制御を目的とした火炎処理工程の検討について	仲間　基樹(北部)
	獣医公衆衛生学会(全国)	豚の抗酸菌症における検査方法の検討	佐藤　まどか
	九州地区獣医学会(53回)	液体培地とPCRを併用した抗酸菌検査システムの確立	宮城　国太郎
	九食協研修会(33回)	液体培地とPCRを併用した抗酸菌検査システムの確立	宮城　国太郎
		豚の抗酸菌症における病変の発生状況及び検査方法の検討	仁平　稔
	全食協病理部会(33回)	豚の腎臓における腫瘤	吉田　崇
	全食協微生物部会(24回)	豚赤痢の迅速診断の検討	宮城　国太郎
	食肉衛生技術研修会(全国)	豚赤痢の迅速診断の検討	宮城　国太郎
		豚の抗酸菌症における病変の発生状況及び検査方法の検討	仁平　稔
	獣医学会年次大会	液体培地とPCRを併用した抗酸菌検査システムの確立	宮城　国太郎
平成17年	技術研修会(30回)	PCRによるトキソプラズマ検査法の検討	喜屋武　向子
		と畜場搬入豚の口蓋扁桃における*Streptcoccus suis*の保菌調査	宮本　雄二郎
		沖縄県のヤギ、イノシシ、マングースにおけるE型肝炎ウイルス抗体保有調査	平良　雅克
		山羊の胆汁からの*Campylobacter*属菌の検出	大兼　英子(北部)
		豚の胆嚢内における*Campylobacter*属菌を主とした微生物保菌調査	銘苅　愛美(北部)
		和牛にみられた全身性脂肪組織炎	宜保　公子
		豚における腎臓病変の検討	仲間　基樹(北部)
		管内A食鳥処理場における疾病発生状況	照屋　理香(北部)
		食鳥検査でみられる疾病の推移	新垣　衡
		Nと畜場豚カット室における衛生状況	比嘉　美咲(北部)
		はちみつ中ミロサマイシンの試験法の検討	加藤　峰史
		沖縄県におけるヤギのとちくと疾病	平川　宗隆
	県獣医学会(36回)	沖縄県におけるブタ、マングース、イノシシのE型肝炎ウイルス保有状況とその特徴	平良　雅克
		と畜検査結果のフィードバックについての取り組み	長嶺　ゆり
	県衛生監視員研修会(36回)	沖縄県におけるブタ、マングース、イノシシのE型肝炎ウイルス保有状況とその特徴	平良　雅克
		認定小規模食鳥処理場の衛生指導	小田　葉子(北部)
		管内N食肉センターにおける豚枝肉の衛生状況	大兼　英子(北部)
	九州地区獣医学会(54回)	沖縄県におけるブタ、マングース、イノシシのE型肝炎ウイルス保有状況とその特徴	平良　雅克
	九食協研修会(34回)	沖縄県におけるブタ、マングース、イノシシのE型肝炎ウイルス保有状況とその特徴	平良　雅克
	全食協病理部会(52回)	和牛にみられた全身性脂肪組織炎	宜保　公子
平成18年	技術研修会(31回)	冷却水の温度と食鳥と体の洗浄・消毒効果に関する調査	平安　綾子
		採卵鶏にみられた鶏白血病を疑う肝臓病変について	森　洋子
		Multiplex PCRによる*Toxoplasma gondii* と*Salmonella* spp.検出法の検討	中村　正治
		食鳥処理場及びと畜場に搬入された鶏及び牛のカンピロバクター保菌調査とPCR-RFLP解析	工藤　奈々
		山羊・豚の食中毒菌保菌調査	柳瀬　多嘉子(北部)
		地方病型牛白血病を疑う症例について	髙木　祐司
		ヤギの舌扁桃	平良　雅克(北部)
		沖縄県の家畜・野生動物等におけるトキソプラズマ抗体保有調査	津田　彩子
		全身性出血を呈した豚の症例について	下村　文二郎(北部)
		豚のドキシサイクリン(TC系)残留を疑った事例	小田　葉子
	県獣医学会(37回)	と畜場搬入豚における*Streptcoccus suis*の保菌状況と分離株の性状	宮本　雄二郎
		Nと畜場における豚・山羊の*Campylobacter*属菌汚染調査	稲嶺　美奈子(北部)
		和牛にみられた全身性脂肪組織炎	髙木　祐司
	県衛生監視員研修会(37回)	Nと畜場豚カット室における衛生状況	比嘉　美咲(北部)
	九州地区獣医学会(55回)	と畜場搬入豚における*Streptcoccus suis*の保菌状況と分株の性状	宮本　雄二郎
	九食協研修会(35回)	PCRによるトキソプラズマ検査法の検討	喜屋武　向子
		はちみつ中ミロサマイシンの試験法の検討	加藤　峰史
	食肉衛生技術研修会(全国)	PCRによるトキソプラズマ検査法の検討	喜屋武　向子
平成19年	技術研修会(32回)	*Streptcoccus dysgalactiae* subsp.*equisimilis* による豚の敗血症	大城　哲也
		県内と畜場に搬入された牛における牛白血病ウイルス保有調査	大場　三緒子
		山羊のトキソプラズマ抗体と飼育環境	安座間　夏紀(北部)
		管内と畜場における豚のサルモネラ保菌状況及び処理工程における重要管理点の設定の検討	仲村　清崇
		グリア繊維性酸性タンパクを用いた脳脊髄組織による牛枝肉の汚染状況調査	仁平　真由美
		伝達性海綿状脳症スクリーニング検査陽性時の施設等の消毒	佐々木　哲(北部)
		ポジティブリスト制度施行後における病畜の扱いについて	照屋　理香
		新と畜検査システムによる生産者別情報還元	加藤　峰史
		食鳥処理場に搬入されたブロイラーにおける鶏舎ごとのカンピロバクター保菌調査	片岡　京子
		食鳥処理場に併設するカット室における製品保管用容器の消毒方法の検討	下司　高弘(北部)
		食鳥処理場に搬入されたブロイラーの疾病状況	中島　秀人(北部)

年 度	学会、研修会名	発　　表　　演　　題　　名	発表者名
平成19年	県獣医学会(38回)	沖縄県の家畜・野生動物等におけるトキソプラズマ抗体保有調査	津田　彩子
	県衛生監視員研修会(38回)	食鳥処理場及びと畜場に搬入された鶏及び牛のカンピロバクター保菌調査と	工藤　奈々
		PCR-RFLP解析	
	獣医公衆衛生学会(全国)	沖縄県の家畜・野生動物等におけるトキソプラズマ抗体保有調査	津田　彩子
	九州地区獣医学会(56回)	Multiplex PCRによる*Toxoplasma gondii* と*Salmonella* spp.検出法の検討	喜屋武　向子
	九食協研修会(36回)	山羊の舌扁桃	平良　雅克(北部)
		豚のドキシサイクリン(TC系)残留を疑った事例	小田　葉子
平成20年	技術研修会(33回)	管内と畜場で多発した豚サルモネラ症	後藤　紀子
		と畜場に搬入された豚のサルモネラ保菌状況および薬剤感受性	大兼　英子
		Multiplex PCRを用いた*Salmonella* Typhimuriumの迅速判定法の検討	北野　崇
		一斉試験法Ｉを用いたHPLCによる殺鼠剤試験法の検討	仲村　清崇
		豚抗酸菌症の病変分布における病理学的考察	津田　彩子
		ヤギの筋肉からのトキソプラズマの分離	喜屋武　向子(北部)
		とさつ解体に使用されるナイフ等の温湯消毒効果の検証	稲葉　千恵(北部)
		採卵鶏の卵巣(キンカン)の衛生管理	銘苅　愛美
		学校での食肉衛生講習会の試み	下村　文二郎(北部)
	県獣医学会(39回)	県内と畜場に搬入された牛における牛白血病ウィルス保有調査	大場　三緒子
		Streptcoccus dysgalactiae subsp.*equisimilis* による豚の敗血症	玉城　正幸
	県衛生監視員研修会(39回)	と畜場における豚のサルモネラ保菌状況及び処理工程における重要管理点の設定の検討	仲村　清崇
	全食協病理部会(58回)	牛の腎臓	津田　彩子
	九食協研修会(37回)	新と畜検査システムによる生産者別情報還元	津田　彩子
		ポジティブリスト制度施工後における病畜の扱いについて	照屋　理香
平成21年	技術研修会(34回)	消化管内容物による豚枝肉汚染実態調査	安座間　夏紀(北部)
		管内ににおける豚丹毒発生状況と分離菌の性状	新垣　尚美
		関節炎型豚丹毒を疑った関節液からの細菌の検索と保留検査採材方法の検討	牛島　有紀
		Multiplex PCRを用いた*Salmonella* Choleraesuis の迅速判定法の検討	大橋　麻美
		和牛の下顎にみられた骨化性線維腫	仲間　京子
		ベンジルペニシリン試験法の検討	仲村　清崇
		食肉安全安心講習会の開催と今後の検討	熊谷　佳子
		鶏の腫大した肝臓病変の検討	山元　朝香(北部)
		採卵鶏のマレック病とリンパ性白血病の病理学的検討	仁平　真由美
		カンピロバクター食中毒リスク低減のための「食鳥の区分処理」に向けた基礎調査	稲葉　千恵(北部)
	県獣医学会(40回)	Multiplex PCRを用いた*Salmonella* Typhimurium の迅速判定法の検討	北野　崇
		県内と畜ヤギ肉からの*Toxoplasma gondii* 分離成績とその遺伝子性状	喜屋武　向子(北部)
		と畜場に搬入された豚のサルモネラ保菌状況及び薬剤耐性	大兼　英子
	県衛生監視員研修会(40回)	学校での食肉衛生講習会の試み	安座間　夏紀(北部)
	九州地区獣医学会(58回)	沖縄県でと畜されたヤギ肉からの*Toxoplasma gondii* 分離成績とその遺伝子性状	喜屋武　向子
	九食協研修会(38回)	Multiplex PCRを用いた*Salmonella* Typhimurium の迅速判定法の検討	北野　崇
		豚抗酸菌症の病変分布における病理学的考察	津田　彩子
	全食協病理部会(60回)	牛の下顎部腫瘤	仲間　京子
	食肉衛生技術研修会(全国)	Multiplex PCRを用いた*Salmonella* Typhimurium の迅速判定法の検討	北野　崇
		豚抗酸菌症の病変分布における病理学的考察	津田　彩子
	獣医学会年次大会	沖縄県でと畜されたヤギ肉からの*Toxoplasma gondii*分離成績とその遺伝子性状	喜屋武　向子(北部)
平成22年	技術研修会(35回)	鶏肉中の*Campylobacter*及び*Salmonella*属菌の管理ガイドライン策定のための基礎調査	新垣　尚美
		カンピロバクター食中毒リスク低減のための「食鳥の区分処理」に向けた基礎調査(第2報)	稲葉　千恵(北部)
		と畜場に病畜として搬入された獣畜の過去4年間の残留抗生物質検査状況	熊谷　佳子
		豚サルモネラ症のと畜検査データ解析	北野　崇
		Multiplex PCR を用いた*Salmonella* Choleraesuis,Typhimurium,Dubulin, 及びEnteritidis の迅速判定法の検討	佐々木　哲
		牛内臓肉における腸管出血性大腸菌汚染調査	向井　晴奈
		鶏の腸管の腫瘤	仁平　真由美
		山羊の毛包虫症	山元　朝香(北部)
	県衛生監視員研修会(41回)	豚の食肉処理施設における高度衛生管理について	稲嶺　美奈子
		食肉安全安心講習会の開催と今後の検討	熊谷　佳子
		カンピロバクター食中毒リスク低減のための「食鳥の区分処理」に向けた基礎調査	稲葉　千恵(北部)
	県獣医学会(41回)	管内における豚丹毒発生状況と分離菌の性状	新垣　尚美
		Multiplex PCR を用いた*Salmonella enterica* serovar Choleraesuis の迅速同定法の検討	佐々木　哲
	九州地区獣医学会(59回)	管内における豚丹毒発生状況と分離菌の性状	新垣　尚美
	九食協研修会(39回)	Multiplex PCR を用いた*Salmonella enterica* serovar Choleraesuis の迅速同定法の検討	佐々木　哲
		管内における豚丹毒発生状況と分離菌の性状	新垣　尚美
	全食協病理部会(62回)	鶏の腸管の腫瘤	仁平　真由美
	食肉衛生技術研修会(全国)	Multiplex PCR を用いた*Salmonella enterica* serovar Choleraesuis の迅速同定法の検討	佐々木　哲
		採卵鶏におけるリンパ性腫瘍病変の病理学的検討	仁平　真由美

年 度	学会、研修会名	発　　表　　演　　題　　名	発表者名
平成23年	技術研修会(36回)	鶏肉中の*Campylobacter*及び*Salmonella*属菌の管理ガイドライン策定のための基礎調査(第2報)	新垣　尚美
		新豚処理施設における豚拭き取り調査	比嘉　幸
		牛及び山羊の腸管出血性大腸菌保菌調査	新垣　貴野
		豚口蓋扁桃からの*Erysipelothrix*属菌および*Salmonella*属菌の菌検索	浅岡　佑太(北部)
		関節炎型豚丹毒保留豚の関節液からの細菌検索	中田　有紀(北部)
		PMA-PCRを用いた*Toxoplasma gondii*の生死判別法の検討	佐々木　哲
		牛の腎臓頭側にみられた腫瘤	沓澤　史絵
	所内研修会(36回)	山羊毛包虫症の発生状況と分子疫学	髙木　祐司(北部)
		迅速スクリーニング検査キットを用いた残留抗菌性物質検査の検討	安座間　夏紀
	県衛生監視員研修会(42回)	牛内臓肉における腸管出血性大腸菌汚染調査	向井　晴奈
		過去4年間に実施した病畜の残留抗生物質検査状況及び生産者調査結果	安座間　夏紀
	県獣医学会(42回)	鶏肉中の*Campylobacter*及び*Salmonella*属菌の管理ガイドライン策定の基礎調査	新垣　尚美
		と畜検査データと農家データの比較分析	北野　崇
		県内と畜場で初めて確認された山羊毛包虫症とその発生状況	髙木　祐司(北部)
	全国山羊サミット(13回)	県内と畜場で初めて確認された山羊毛包虫症とその発生状況	髙木　祐司(北部)
	九食協研修会(40回)	鶏肉中の*Campylobacter*及び*Salmonella*属菌の管理ガイドライン策定の基礎調査	新垣　尚美
	九州地区獣医学会(60回)	県内と畜場で初めて確認された山羊毛包虫症とその発生状況	髙木　祐司(北部)
	食鳥肉衛生技術研修会(全国)	鶏肉中の*Campylobacter*及び*Salmonella*属菌の管理ガイドライン策定の基礎調査	新垣　尚美
平成24年	技術研修会(37回)	*Actinobacillus pleuropneumoniae*による多発性肝炎の病理学的検索	阿左美　有右
		牛の膵臓の腫瘤	沓澤　史絵
		山羊肝臓病変の病理学的考察	浅岡　佑太(北部)
		食鳥処理におけると体の汚染実態調査と改善策の検討	銘苅　朋子
		ゼロトレランスを目指した牛枝肉汚染実態調査	玉代勢　旦子
		豚全部廃棄データを活用した生産者へのフィードバックの試み	宮良　当一郎
		Multiplex PCRによる増菌培養液からの*Salmonella* Choleraesuis検出法の検討	新垣　貴野
		LAMP法を用いた豚丹毒菌および*Streptococcus suis*の検出法の検討	宮本　雄二郎(北部)
		食品中に残留する動物用医薬品に関する試験法の妥当性評価に向けた取り組み	稲葉　千恵
	県衛生監視員研修会(43回)	迅速スクリーニング検査キットを用いた残留抗菌性物質検査の検討	安座間　夏紀
		牛及び山羊の腸管出血性大腸菌保菌調査	新垣　貴野
	県獣医学会(44回)	Multiplex PCRによる増菌培養液からの*Salmonella* Choleraesuis検出法の検討	新垣　貴野
		ヤギニキビダニのミトコンドリアCo I遺伝子解析	髙木　祐司(北部)
	九州地区獣医学会(61回)	Multiplex PCRによる増菌培養液からの*Salmonella* Choleraesuis検出法の検討	新垣　貴野
		ヤギニキビダニのミトコンドリアCo I遺伝子解析	髙木　祐司(北部)
	全食協病理部会(66回)	牛の膵臓の腫瘤	沓澤　史絵
	食肉衛生技術研修会(全国)	山羊毛包虫症の発生状況および分子疫学的調査	髙木　祐司(北部)
	獣医学会年次大会	沖縄県内と畜場で初めて確認された山羊毛包虫症の発生状況および分子疫学的調査	髙木　祐司(北部)
平成25年	技術研修会(38回)	残留抗生物質検査に用いる感受性測定用ブイヨンの代替培地の検討	玉代勢　旦子
		Salmonella Choleraesuis PCR検査法の改良について	安冨祖　理香
		県内と畜場で分離された豚由来*Salmonella* Choleraesuisの発生状況および薬剤感受性	大山　み乃り(北部)
		微生物汚染の低減を目指した牛内臓肉の処理方法の検討	具志堅　萌子
		山羊の食中毒起因菌保菌調査におけるTA10ブロスの有用性の検討	仲本　佑子
		大規模食鳥処理場における高病原性鳥インフルエンザ発生時の対策について	松川　国洋(北部)
		Aブロイラー食鳥処理場における伝染性ファブリキウス嚢病	仁平　美咲
		管内食鳥処理場で認められた鶏の骨髄性白血病	阿左美　有右
		ブロイラーにみられた真菌による多発性肉芽腫性炎	長嶺　ゆり
		豚腎臓にみられた結節性汎動脈炎	浅岡　佑太(北部)
	県衛生監視員研修会(44回)	牛枝肉に付着する汚染物低減に向けた取り組み	玉代勢　旦子
		食品中に残留する動物用医薬品に関する試験法の妥当性評価に向けた取り組み	稲葉　千恵
	県獣医学会(44回)	豚全廃棄データを活用した生産者へのフィードバックの試み	宮良　当一郎
		LAMP法を用いた豚丹毒菌および*Streptococcus suis*の検出法の検討	宮本　雄二郎(北部)
	九食協研修会(45回)	*Actinobacillus pleuropneumoniae*による肝炎の病理組織学的検索及び肉眼病変の回顧的観察	阿左美　有右
		LAMP法を用いた豚丹毒菌および*Streptococcus suis*の検出法の検討	大山　み乃り(北部)
	全食協病理部会(67回)	鶏の肝臓と脾臓	阿左美　有右
		豚の腎臓	浅岡　佑太(北部)
	食肉衛生技術研修会(全国)	*Actinobacillus pleuropneumoniae*による肝炎の病理組織学的検索及び肉眼病変の回顧的観察	阿左美　有右

4. 歴 代 所 長 名

沖縄県中央食肉衛生検査所

初代所長	饒平名　知市	昭和49.4.1～昭和52.3.31
2代〃	金城　永三	昭和52.4.1～昭和55.3.31
3代〃	山城　英文	昭和55.4.1～昭和62.3.31
4代〃	仲田　安雄	昭和62.4.1～昭和63.8
5代〃	大城　孝喜	昭和63.8　～平成8.3.31
6代〃	大城　信雄	平成8.4.1～平成10.3.31
7代〃	大城　章信	平成10.4.1～平成12.3.31
8代〃	比嘉　次郎	平成12.4.1～平成16.3.31
9代〃	平川　宗隆	平成16.4.1～平成18.3.31
10代〃	長田　悦朗	平成18.4.1～平成19.3.31
11代〃	渡口　政司	平成19.4.1～平成23.3.31
12代〃	與那原　良克	平成23.4.1～平成26.3.31
13代〃	大野　明美	平成26.4.1～

沖縄県北部食肉衛生検査所

初代支所長	大城　章信	昭和49.6.1～昭和53.3.31
2代〃	花城　康永	昭和53.4.1～昭和58.3.31
3代〃	宮城　康夫	昭和58.4.1～昭和60.3.31
4代〃	新城　幸英	昭和60.4.1～昭和62.3.31
5代〃	大城　孝喜	昭和62.4.1～昭和63.8
6代〃	屋比久　進	昭和63.8　～平成5.3.31
7代〃	幸喜　吉信	平成5.4.1～平成6.3.31
初代所長	幸喜　吉信	平成6.4.1～平成10.3.31
2代〃	大城　章信	平成10.4.1～平成10.7.14
3代〃	城間　秀栄	平成10.7.15～平成13.3.31
4代〃	喜久嶺　政男	平成13.4.1～平成15.3.31
5代〃	比嘉　健俊	平成15.4.1～平成17.3.31
6代〃	中島　秀人	平成17.4.1～平成20.3.31
7代〃	長田　悦朗	平成20.4.1～平成22.3.31
8代〃	新里　武則	平成22.4.1～平成25.3.31
9代〃	平安　常寛	平成25.4.1～

注）平成6年4月1日より沖縄県食肉衛生検査所が沖縄県中央食肉衛生検査所に、沖縄県食肉衛生検査所北部支所が沖縄県北部食肉衛生検査所となる。

注）平成10年4月1日～7月14日まで北部食肉衛生検査所長を中央食肉衛生検査所長が兼務。